

43148

教科書文庫

4
8/10
42-1937
2000.0
39763

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

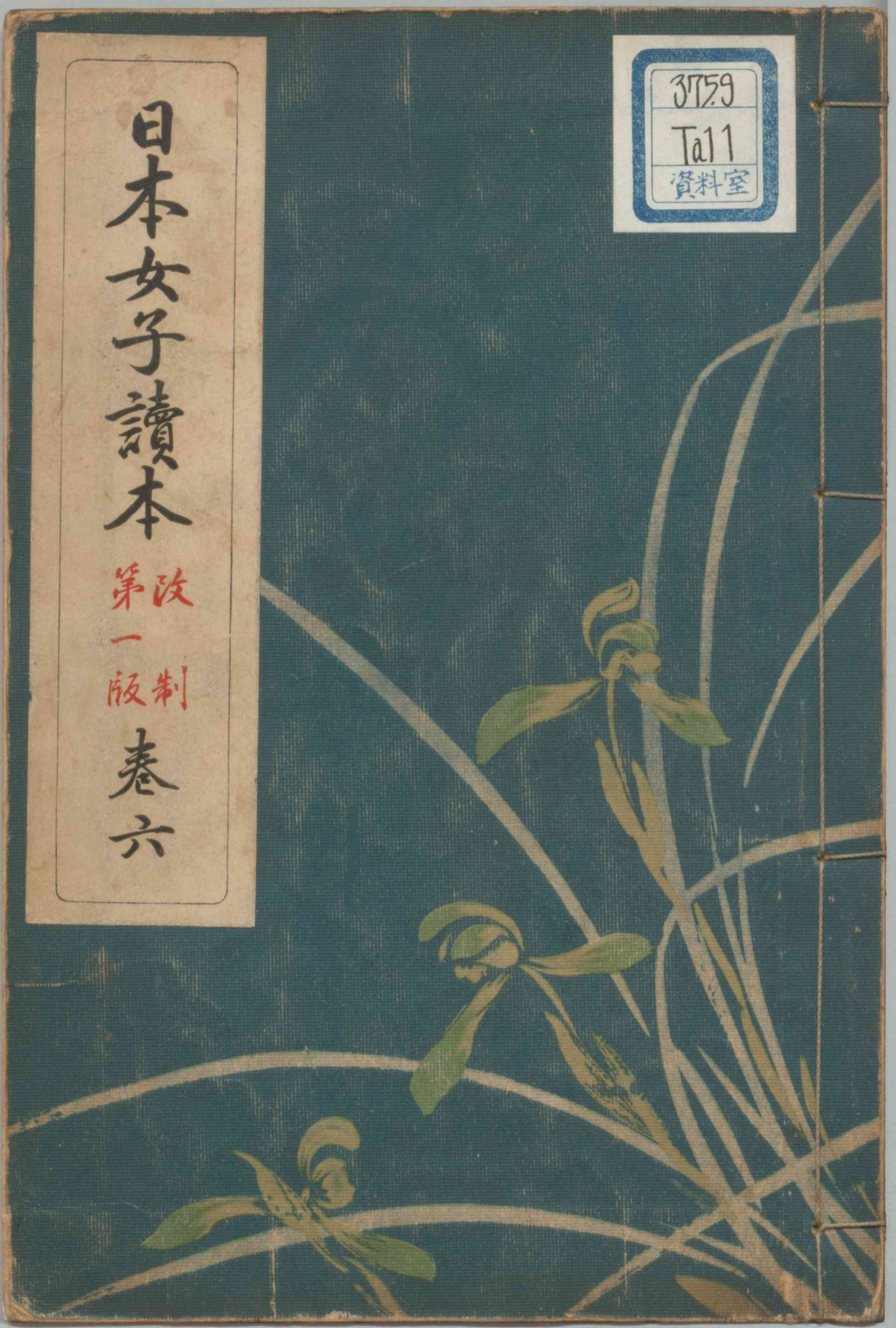
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8

2 1 20 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10 6 8 7 9 5 4 3 2 1 0

3759  
Ta11  
資料室

日本女子讀本  
第改  
一版制  
卷六



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

375.9  
Ta11

資料室

文 部 省 檢 定 濟

高等女子學校國語科用 昭和二十年十二月十七日

文學博士高木武編

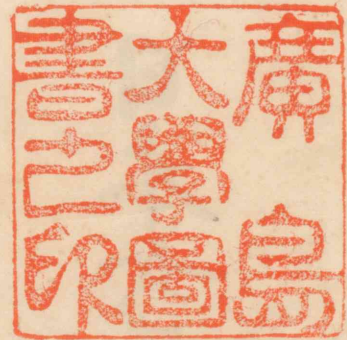
日本女子讀本

改制  
第一版

東京富山房藏版



幼き我曾ちた 横尾芳月筆



日本女子讀本

改第一版 卷六

目次

- 一 鶏
- 二 眞珠貝(詩)
- 三 秋三題
  - 一 山里の月
  - 二 砧
  - 三 秋の名残
- ケ四 空行く雁

- 薄田 泣菫 一
- 與謝野 晶子 二
- 加藤 千蔭 九
- 清水 濱臣 二
- 藤井 高尙 二
- (異本會我物語) 三

目次

山五 箱王と祐經

(舞の本元服會我) 六

六 蟲の音と秋草

高濱 虚子 三

クセ 落柿舎の記

向井 去來 三

八 樹の根

和辻 哲郎 三

九 新聞社

土岐 善麿 三

二〇 ロンドンの霧

夏目 漱石 四

山二 柿くへば(俳句)

(諸 家) 兎

三 田園の春秋

長塚 節 三

一 春

吾

二 秋

吾

三 人間的情味

相馬 御風 五

山ケ 二四 仁和寺

吉田 兼好 五

一 先達

二 足鼎

三 猫また

四 高名の木のぼり

〇 一五 平安京

藤岡 作太郎 六

山六 待賢門の戦

(平 治物語) 七

一

三 入道

合

七 落日

長田 幹彦 六

六 蜜柑

芥川 龍之介 七

山ケ 一六 山の風(短歌)

(諸 家) 一六

三 集團的儀禮

三 扇の的

三 或日の蓮月尼(戯曲)

三 人臣の道

三 まごころ

下田次郎 二三

(平家物語) 三〇

岡本かの子 三五

北畠親房 二七

芳賀矢一 一四

國民精神篇

日本語の特質その二



薄田泣菫  
名は淳介、詩人、隨筆家、岡山縣の人、明治十年生。

日本女子讀本

第一版 卷六

一 鶏

薄田泣菫

ふと眼がさめた。頭をもちあげて寢室の小窓へ目をやると、戸外はまだ墨汁のやうに眞暗らしかつた。そのまゝうとくとしとてゐると、どこからか雄鶏の曉を告げる甲高かんたかな強い鳴聲が聞えて來た。

こなひだ

「鶏が鳴いてゐるね。どこか近所で飼つてゐると見えるな。」  
私は誰に話しかけるともなくそんなことをいつた。隣の室から、家の者が寢返りでも打つらしい物音がもぞくさと聞えた。  
「あれはお隣の鶏ですよ。ついこなひだまで雛だつたのにもう

その次の瞬間には

なほ名残を惜しんでそこらに逡巡する夜を蹴散らして

時を告げるやうになつて……」  
家の者は寢ぼけ聲でこんなことをいつたやうだが、その次の瞬間には、すぐにまた寢ついたらしく、すや／＼といふ寢息の音が微かに聞えて來た。  
私はじつと臉を合はせてみたが、なか／＼容易には眠れなかつた。

曉を告げる鶏の聲。あの聲こそは、私がそれと氣づかないで、年久しく私の生活から失つてゐたものだつた。小さな農村に生れて、そこで少年の頃を過した私にとつては、鶏は私の生活の一部分に外ならなかつた。私たちは日ごと／＼夜がまだ全く明け離れないうちから、程なく曉が來ることを雄鶏によつて教へられたものだ。その聲は、なほ名残を惜しんでそこらに逡巡する夜を蹴散らして、やがて明けゆくその日をしつかりと把握するに足

夢うつゝの境

なまけ心に鞭打つて

しのゝめ時

暗黙の間に傳へ

東天に搖曳する曉のほのかなおとづれ

りるほど朗かで、雄健なものだつた。私たち農家に生れたものは、晝間の働きてどんなに疲れてゐようとも、夢うつゝの境にその聲を聞きつけると、

「もう朝がやつて來たのだ。」

と、どうかするとまだ寢床の中に居残らうとするなまけ心に鞭打つて、すぐにも起きあがらねばならなかつたのだ。それほどまでに雄鶏のもつ比類のない敏感さは、しのゝめ時のあるかなきかの薄明うすあかりの動きをも暗黙の間に傳へ、その健かさはまた、曉そのもののもつ生れたばかりの新鮮さと雄々しさとを感得してゐるのだ。

いくら鶏舎の扉を嚴重にたたきつても、どんな微かな光線をもゆるさぬほど、こまめに隙間々々を目張しても、そんなことには一向頓着なく、眞暗な小舎の中の雄鶏が、いち早くも東天に搖

いろんな想像  
をほしいまゝ  
にした

曳する曉のほのかなおとづれを感知するその感性は、一體どこから來たものだらうか。昔の人はそれを解釋するのに、いろんな想像をほしいまゝにしたものだ。

その一説に、——知らぬ國の中央に桃都山とうとさんといふ大きな山が聳え立つてゐる。その山に桃都といふ世にもすばらしい大樹が一本衝き立つてゐるが、その樹の枝と枝との隔りが、ざつと三里ほどもあるといへば、それがどんなに大きな樹であるかが、ほぼ想像出來ようといふものだ。その樹の上枝に天鷄が一羽棲んでゐる。東の空から流れ出づる夜明の第一の光が、横さまにばつと樹の頂を射て、そこらの枝も木の葉も黄金色に照り輝くと、それに氣づいた天鷄は、悦に胸を躍らして、喇叭のやうな聲で高らかに朝の讚歌を唱へる。すると、下の方の萬家の鷄舎で、その遠音を聞きつけた雄鷄たちが、下界はまだ薄暗ながら、みんなそれに

倣つて、一齊に夜明を告げるといふのだ。

眞暗な鷄舎の中にゐて、いち早く曉を知りもし、唱ひもするのを解釋して、それを天鷄の遠音のせりだとしてゐるのは、間違つたことではないが、その天鷄は人間の想像を絶するやうな大樹の枝にとまつてゐるのではなく、實は血紅色の鷄冠とさかをかぶつた雄鷄の感覺の中に棲んでゐるのだ。

それは彼等の祖先が、今も印度の深い森の中にある野鷄たちと同じやうに、その樹かげ、この草の中をあさり歩いてゐた頃からもち傳へた、知られぬ感性に相違なかつた。

昔は、山に、こもつて修業に専念しようとするには、何をさし措いても、自分と一緒に羽の白い鷄と毛並の白い狗とだけは、必ずつれて行かなければならぬことになつてゐた。白鷄と白狗とは、深山の邪氣を拂ふのになくてならぬものにせられてゐたらし

想像を絶する

何をさし措い  
ても



思惟の生活に  
浸つてゐる

い。どんな理由から白色のものが選ばれることになつたか、それは知らないが、深山に隠れて靜かに思惟の生活に浸つてゐるものにとつては、見馴れぬものを咎める狗の叫と夜明を告げる鶏の聲とはめつたに缺くことの出来ないものだつたかも知れなかつた。

「その日／＼の立派な豫言者だ。」

私は寢床の中で寢返りを打ちながらさう思つた。この紅い鶏冠をかぶつた豫言者を自分たちの家に飼ふことによつて、農夫たちが一年三百六十五朝、しのゝめ時の冷たいすが／＼しい大氣と、明るい心と、健康とを、それ／＼自分の家へたつぷりと取りこむ。それは何といふ手輕な、そしてまた幸福なことだらうと私は思つた。

(獨樂園)

二 眞珠貝

與謝野晶子

與謝野晶子

歌人、堺市の  
人、明治十一  
年生。

人こそ知らね

眞珠の貝は常に泣く。

人こそ知らね、大海は

風吹かぬ日も浪立てば、

浪に揺られて貝の身の

處さだめず伏しまろび、

千尋の底に常に泣く。

ましてたま／＼目に見えぬ

小さき砂の貝に入り、

浪に揺らるゝ度ごとに、

敏く優しき身を刺せば、

避くる由なき

避くる由なき苦しさに、  
 貝はもだえて常に泣く。  
 忍びて泣けどをりくりに  
 涙は身よりにじみ出で、  
 貝に籠れる一點の  
 小さき砂をうるほせば、  
 清く切なきその涙、  
 はかなき砂を蔽ひつゝ、  
 日ごとに玉と變れども、  
 貝はまるびて常に泣く。  
 東に昇る「あけぼの」は、

切なき

その温かき薔薇色を、  
 夜行く月は水色を、  
 虹は不思議の輝きを、  
 ともに空より投げかけて、  
 砂は眞珠となりゆけど、  
 それとも知らず貝の身は、  
 浪に揺られて常に泣く。

三 秋三題 (擬古文)

一 山里の月

耳に鳴弾の音を聞かず、目に旗手の靡きをしも見ぬ御時世に  
 あひては、何事につけてもうしとわびしと怨みかこつべきこと  
 やはある。されば世を避くとしもあらねど、あきじこる市の巷に

加藤千蔭

(晶子詩篇全集)

加藤千蔭  
 本姓は橋、江戸時代後期の  
 歌人、文人、  
 江戸の人、文  
 化五年歿、年  
 七十四。  
 ことやはある

山里に訪ひ  
来る人の言  
ふことは  
住むか  
やま

住めるになん  
ありける  
秋こそことに  
「山里は秋こ  
そことわび  
しけれ鹿の鳴  
く音に目をさ  
ましつゝ六壬  
生忠琴、古今  
集」

そがひ

こき散らす

たぐへ

近き賑はしさをいとひて、この山里にはうつろひ住めるになん  
ありける。秋こそことに」といへるもうべなるかな。籬の下にたゞ  
ずめるを鹿、松に木傳ふましらの聲も、ひとりある人を慰むるに



藤加千藤

似てあはれなるに、茜さす日も  
入りはて、杣人の斧の響絶えて、  
端山のかひより月さしのぼれ  
ば、そがひの嶺より落つる瀧つ  
瀬は、黄金の色の絲引きはへた  
らん如く岩に碎くる水は、白玉  
をこき散らすかとぞ疑はる。と  
こしへに清らにして、ものに滞ることなきを我が心とはせんと  
思ふに、たぐへてんものはなぞ、たゞ月と瀧つ瀬とのみ。

うけらが花

清水濱臣

江戸時代後期  
の歌人、文人  
江戸の人、文  
政七年歿、年  
四十九

皆あらず

藤井高尙

江戸時代末期  
の文人、備中  
の人、天保十  
一年歿、年七  
十七

このすまひこ  
そ云々

「山里に訪ひ  
くる人の言  
ふことは  
住むか  
やま」  
圓、新古今集

二 砧

清水濱臣

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむ  
もまたしきる。かりがねの聲の砧をさそふにやあらん、砧の音の  
かりがねにかよふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そもこの  
音のかなしきか、住む里のさびしきか、うつをりのうき故か。皆あ  
らず、聞く人の心のさびしきなり。

(泊酒舎集)

三 秋の名残

藤井高尙

秋の名残を慕ひて、残る紅葉をたづね見がてら、或人の山住を  
とふに、柴の戸閉ぢて人けも見えず。さゝ垣の隙よりのぞけば、苔  
むせる庭に紅葉散りしきたり。このすまひこそ羨ましけれ」とう  
ち誦して暫し立てるに、うしろより人の来る音す。かへりみれば、  
あるじの落葉拾ひて歸れるなりけり。いたく喜びて、「いざこなた  
に。」とさそひ入れて、かくて住むほどの物語す。珍しく聞きゐたる



空に飛ぶ翼も  
別の翼ぞまじ  
へざりける

兄弟二人庭に出でて遊びけるに五つつれたるかりがねの南を



(筆岱雪村小)てれ入差を顔に袖

さして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ、箱王殿。空に飛ぶ翼も、別の翼ぞまじへざりける。五つつれたるかりがねの中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。ものいはぬ鳥類さへかくの如し。我等は人倫に生れながら、わ殿は弟。我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありしかや。父だにも世におはし

まさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射

思ひ續ければ

人もこそ聞け

わ上藤

語りあふま  
はなけれども

ありきなん。我等より幼き者も馬鞍、弓矢をもつて物を射ありくこと。の羨ましさよ。これ等のことども思ひ續ければ、いつよりも今宵は父御前のこひしくおはしますぞや。とて、袖に顔を差入れて、さめんと泣きければ、弟も小賢しく顔を合はせて泣きゐたり。一萬が乳母の女房これを聞きて、あなあさまし、人もこそ聞け。いかにわ上藤たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とくとく入らせ給へ。と、恐しげにいひければ、二人の者は門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにつけり。

その後、二人の者ども、わが身のほどを知りぬれば、おくれし父を慕ひつゝ、語りあふまではなけれども、たゞ目ばかりを見あはせて、互に袖をぞ濡しける。いまだ十歳にも満たざる年程には過ぎて、あはれはこれ等にとゞめたり。或時、兄弟は、竹の小弓に薄矧はの小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけ

ともかくもな  
りなん  
男の一の能

文治  
安徳天皇の御  
代  
箱根

ここは箱根山  
中にある箱根  
権現。今の國  
幣小社箱根神  
社である。祭  
神は瓊瓊杵  
尊・彦火火出  
見尊・木花開  
耶姫命。  
こしの式部  
假の名。

るに、二人立向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬箱王に申しけるは、「我等もいつか成長し、わ殿は十三、我は十五にだにもなるならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經を、かくの如く差合ひ、射取りて、後には、ともかくもなりなん。わ殿も弓をよく射習ひ給へ、我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。」といひければ、弟もうちうなづきけり。年ばへには恐しきことかなと人々思ひけり。

(真本會我物語)

五 箱王と祐經

文治元年正月十五日に鎌倉殿箱根詣とぞ聞えける。さる間箱根には、鎌倉殿の御参りとて、大衆衣を用意し、兒の衣裳を結構す。その中に箱王殿衣裳のことをたしなまで、幼稚で離れし父御のこと、今のやうに思はれて、しのびの涙せきあへず。こしの式部を

いかに候  
伊東入道  
伊東祐親。  
その由聞くよ  
りも

所せく

近づけ、いかに候、式部殿、鎌倉殿の御前へ、我は出仕を申すまじ。それをいかにと申すに、祖父伊東入道殿、謀叛人なりとて、御咎めありしこと、世には隠れも候はず、式部殿とぞ申しける。式部その由聞くよりも、さも候へ、これほど大衆結構候に、よそながら御見物あれかし、箱王殿とぞ申しける。さらば見物せんとて、鎌倉殿の御参りを、今やおそしと待ち給ふ。

さる間、鎌倉殿御登山ましまして、講堂に籠らせ給へば、大名高家の人々、大庭廣縁に所せく並みたり。その中に箱王殿、式部大夫を供として、外陣の格子の際まで出て、仇の祐經と、その名ばかりは聞きけれど、その姿をば、いまだ見ず。さればとて、「祐經は」と問ふならば、式部大夫が心得て、「あれぞ。」と教ふることあらじ。八箇國の大名、小名の名字を問うて見んずるに、祐經といふ者に問ひ當らぬこと、よもあらじと、まだいとけなき御心に、案を廻すぞ恐し

さうぞ  
秩父重忠  
畠山重忠。

伊東  
今の静岡縣伊  
東町。  
ゆゝしげなる

き。  
「さてあの君の左手の御脇に直られたるは誰さうぞ。」武藏國の住人に、秩父重忠と申す人にておはします。「さてまた右手の御脇に直られたるは誰さうぞ。」相模國の住人に和田義盛候よ。「さてまた君の御前に中座に着いてましますは、いづくの國の誰さうぞ。」伊豆國の住人北條四郎時政とて、君のためには御舅。「その次に着いたるは誰さうぞ。」田代冠者信綱とて、これも伊豆には大名なり。「その次々は誰さうぞ。」逸見武田小笠原一條板垣南部下山、皆着いたり。「といひけれど、おゝ、なほ祐經と聞かざるは、箱王に包むか、おぼつかなし。さてはこの度の御供を祐經は申さざりけるや。御供申すものならば、伊東の大將にてある間、末座にはよもあらじ。さらば歸らんと思ひしが、また立歸り問うたりけり。さてあの禮盤の際に、薄香染の直垂を着ゆゝしげなる大名は、いづくの國、誰さ

あれこそ……  
おはしませ  
ようぞ

うぞ。「式部この由聞くよりも、あれこそ御身のためには眼前の從兄、工藤一藤祐經と申す人にておはしませ。箱王殿聞し召し、ようぞ立歸り問うたりけると思へば、幼稚で離れし父御のこと、今のやうに思はれて、仇なれども懐かしく、見とれてここに箱王殿茫然としてぞおはします。

何とかしたりけん祐經、箱王を見つけ、扇を上げて、「これへ〜。」とぞ招きける。

さる間、箱王殿、仇の呼ぶが嬉しさに、大勢の中をかき分け、かき分け通り、祐經が側へ寄つたりけり。祐經、箱王を膝の上に抱きのせ、「御身のためには御一族の片端と召しおかれたる工藤一藤祐經



(畫挿本の舞)服元の王箱

公方(公の御用)  
將軍(將軍の事)

あはぬ引出物

と申すものにて候が、箱王殿のこの寺にまします由を承れども、公方の隙なき間、今まで御目にかゝらぬなり。見參の初に、何をか箱王殿にまゐらせん。少人のためにはあはぬ引出物なれども、家に傳はる重寶なれば」とて、赤木の柄に銀の目貫、胴金打つたりし小さすがを取りいだし、箱王殿にぞ引きにける。

箱王この由見るよりも、あゝら嬉しや、仇の手よりも刀を得たことは、ひとへに箱根の權現の致させ給ふところなり。取つて引寄せ一刀と思ひきりてはありけれど、祐經は古兵、箱王は生年十三なり。腕が細くして着籠の上を通すまじ。通さぬものならば、鎌倉殿の御目の前、大小名の御覽ずる處にて、親の仇を討ち損じ、冥途にまします河津殿、末代曾我の浮名を下さんことの悲しさよ。とやせん、かくやあらましと、案じ煩ふその時刻、鎌倉殿の御還向とて、大名小名、一度に座敷をはらりと立つ。祐經も座敷を立つ。

まのあたりなる仇をも、討たて過すぞ無念なる。(舞の本、元服曾我)

六 蟲の音と秋草

高濱 虚子

高濱虚子  
名は清、伊人、  
松山市の人、  
明治七年生。

闇の庭には、たゞ蟲の音が聞える。少し朽ちた竹縁に腰をかけた、冷やかな沓脱石の上に素足をのせて、じつと闇の庭の面に向つてゐると、庭一面に蟲の聲がしてゐるやうに思はれる。

「あれは松蟲の聲だらうか。」

「あれはこほろぎの聲だらうか。」

「あれはきりくすの聲だらうか。」

などと、一つづつに蟲の音を聞き分けようとするのは、ちやうど綾錦の糸を、これは赤、これは青、これは金、これは緑と選り分けるやうなものである。

なるほど、一つづつの音を聞き分けようとするれば、松蟲こほろ



ぎきりふ、すと區別はつくけれども、それ等の蟲の音は、いづれも一枚の綾錦に織りなされたやうに、たゞ全體が凜々と響いて來るのである。闇の夜であるから、確かにはわからないが、かそこにあるのであらう一叢の草の根もとから、またここにあるのであらう一叢の草の根もとから、それ等の蟲の音は湧き立つやうに響いて來る。何千、何萬、何十萬といふ、數を量ることの出來ぬ多くの蟲が、いづれも互に負けまいと音を張りあげるのであるから、可なり騒々しい。しかしながら、闇の涼しさといふやうなものがあるのなら、それは必ずこの蟲の音から來るものであらう。否、秋も半ば過ぎであるから、涼しさといふ感じは通り越して、うすら寒い感じである。

ふと聞くと、床の間の壁の所に當つても蟲の音がする。天井の方に當つても蟲の音がする。床の下に當つても同様に蟲の音が

聞える。今まで庭ばかりと思つてゐたのは間違であつて、自分を取圍んで、四方から蟲の音が聞えるのである。よくよく聴くと、聲高い一つの蟲が天井の隅の方で鳴きはじめる。さうすると、それに負けまいとして、同じ高音が床の下から聞える。今まで庭に鳴いてゐた蟲の聲の中にも、一際高いのが聞えはじめて、天井や床の下の音に張りあふもののやうに思はれる。

じつと闇を見詰めてゐると、それ等の蟲の音色が、闇の中に明らかに見えるやうな心持がする。蟲の音色が見えるといふのは、變なやうではあるが、「ちんちろりん」と鳴くその鳴聲は、いかにも透明な音色であつて、闇の中にその音色が明らかに見えるやうな心持がする。また「りん」と鳴く蟲の音も、同じやうに透明な音色である。その音色は、明らかにここもとにあるぞよといふ風に響く。すいつちよといふ蟲の音も、同じ透明な響である。そ

## 透明な音色

の「すいつちよ〜」と鳴くのは、ここですよといふ風に明らかに響く。が「ちや〜〜」と格段に強く騒がしく響くのは、蟲の中のあばれものででもあるやうに、他の蟲のかはいらしく、ものあはれげであるのと違つて、どことなくのさばり出るやうな感じであるが、しかしそのうちに、また一種のあはれさが見える。この大きいさばかり出る蟲の音は、外の蟲の音に比べると格段に高く、ここに私が鳴いてゐますといふ風に、明らかに感受せられる。さうして、それ等の諸音が、際立つて大きいから、つぶ〜とした小さいのに至るまで、幾百千となく錯綜して響く。この音色の、もつれ、ほどけ、巻きかへし、繰りかへしするさまが、手に取るやうにはつきりと聞えて来る。それがちやうど闇に目があれば、眞前に明らかに見えるやうな心持がする。

沓脱石の上を足で探ると、鼻緒のとれかゝつた庭下駄がある。

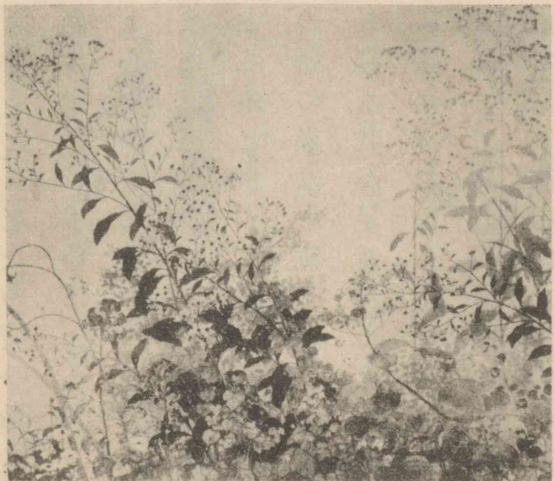
音をひそめる

それをつつかけて庭に下り立つてみる。足音をたてて庭の道に下りると、こなたの叢の蟲は少し音をひそめる。が、こなたの叢の蟲は平氣で鳴いてゐる。暫くそこに佇んでゐると、「もう大丈夫だ。」と心をゆるしたもののやうに、すぐまた蟲の音は高まつて来る。また二三步歩くと、その邊の叢は少しひそみ音になつて、五六歩七八歩と歩くにつれて、同じやうなことを繰返す。もう最前の叢の所の蟲は、平氣で高音を張りあげて鳴いてゐる。今、音をひそめた蟲も、我が足音が行き過ぎると、すぐ高音になつて鳴く。最前縁に腰かけてゐる時分も、なほ床の間や、天井や、床下に鳴く蟲の音もあつて、あたかも蟲の音の中にあるやうに覺えたが、今ここに來て庭の眞中に立つてみると、いよ〜蟲の音のたゞ中にあるやうな心持がする。

この時、どことなくほの白くなつて來たことに氣がつく。もう

たゞ中

月白があがつた



紫苑 (筆琴眞築都) 苑

そろ／＼と下弦の月の出る頃であるから、今、月白があがつた頃であらうと思ふ。さういへば、草花に置いてゐる露の玉が、少しづつ光つて来るやうな心持がする。今までは闇の中にたゞ黒く叢のあることを知つてゐたばかりであつたが、それが萩の叢であり、紫苑の叢であり、薄の叢であり、桔梗の叢であり、をみなへしの叢であることが、漸くにしてわかりかける。萩の圓くしだれてゐる先が、地をすつて暫く伸びて、びんとその先のはねあがつてゐる様子などが、だん／＼と明らかになつて来る。秋風

をみなへし

夜目にも……見える

が来て、その叢に吹きあてると、暫くはたゆたふやうにしてゐるが、やがて二つに割れて、その風をじつと支へてゐて、その風の力が弱ると、ざわ／＼と音がして、再びもとのやうに圓くしだれた形に戻る。こんなこともよく見えるやうになつて来る。やがて萩の花の紅い白いといふことも、見わけがつくやうになつて来る。紫苑の丈高い莖の先に、一輪づつ花をつけてゐる様子も明瞭になる。その紫苑の葉の、莖の根もとから伸びてゐるさまが、夜目にも力強く見える。をみなへしの黄色く、ものあはれげに咲き満ちてゐるさまも見える。桔梗の花は、とりつくろふ術も知らぬものやうに、かたくなな人のやうに規則正しく花をつけてゐる。その有様も手に取るやうに見える。

月はやがて我等の目に入るあたりまでのぼつて来た。下弦の月といつても、その弓は可なり引絞つた形である。空には一點の

たゞすまひ。

雲もないので、今は月光は隈なく庭の面を照らす。先に闇の中にこの庭を見詰めた時の感じとすつかり違つて、今はもう庭のたゞすまひが残らず目に入るやうになつた。

ふと氣がついて見ると、やはり蟲の音は盛んに聞えてゐるのであるが、どうしたものか、かく目に庭の景色が明らかに見えるやうになつてからは、その蟲の音は前ほど明らかに聞えぬやうな心持がする。萩の叢を吹く風は、その後度々同じやうな姿を繰返すのであるが、その萩の叢の風に揺られるさまが、明らかに見えれば見えるほど、蟲の鳴聲がおぼろげになつてゆくやうな心持がする。響蟲は相變らず聲高く「がちや〜〜」と鳴きたててゐるが、それでも明るい月の下では、あはれにか細い音に聞える。私は再び竹縁に來て腰をおろして、庭の面を眺める。萩の叢紫苑桔梗をみなへしなどの叢には、一面に露が降りて、きら〜〜と

光つてゐるさまが、手に取るやうに見える。ちやうど最前闇の中に蟲の音を聞いた時、その蟲の音が一つ〜〜に透明な音色に見えたやうに、その露の玉はいち〜〜透明に揺れ動く。蟲の音の方は今はおぼろげになつて、最前のやうな透明な光を見せることは出來ぬが、それとなり代つて、今は露の玉が一つ〜〜に光つて、眼前の葉先に揺らいでゐる。かの床の間や、天井や、床下に聞えてゐた蟲の音も、今はどうやらやんでしまつたやうだ。月光は少し破れた軒端から疊の上に光を落し、床の下をも明るく照らしてゐる。

私は秋草におく露の玉の風に揺らぐたびに、大きなかたまりになつて、それが一つ〜〜に光つてゐる光景に眼を見張つて、再び蟲の音に耳を傾けた。

(高濱虚子全集)

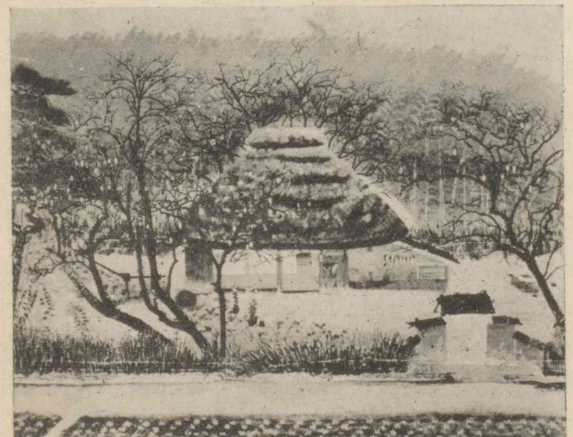
向井去來

名は兼時、江戸時代初期の俳人、松尾芭蕉の高弟、長崎の人、寶永十四年歿、年五十四。落柿舎主人。今、京都市の西部、嵯峨王祥が志云々、晋書、任、傳、に、丹、奈、實、を、結、ぶ、あ、り、母、命、じ、て、こ、れ、を、守、ら、し、む、風、雨、あ、る、ご、と、に、祥、輶、ち、樹、を、抱、い、て、泣、く、。

七 落柿舎の記

向井去來

嵯峨に一つの古家はべり。そのほとりに柿の木四十本あり。五とせ六とせ経ぬれど、木の實ももち來らず、代かふるわざも聞かねば、もし雨風に落されなば、王祥が志にも恥ぢよ、もし鳶鳥にとられなば、天の帝の恵にも洩れなんと、屋敷もる人を常はいどみの、しりけり。今年八月の末、かしこに至りぬ。をりふし都より商人の來り、立木に買ひ求めんと、一貫文さし出し、悦びかへりぬ。



(筆人山米見里) 秋の舎柿落

夜すがら

返しくれたびてんや、便なければ

和辻哲郎 哲學者、文學博士、東京帝國大學教授、兵庫縣の人、明治二十二年生。

八 樹の根

和辻哲郎

余はなほそこにとままりけるに、ころ／＼と屋根はしる音、ひしひしと庭につぶるゝ聲、夜すがら落ちもやまず。明くれば商人の見舞ひ來り、梢つく／＼とうちながめ、我むかふ髪の頃より白髮生ふるまで、この事を業としはべれど、かくばかり落ちぬる柿を見ず。きのふの價返しくれたびてんや。」と佗ぶ。いと便なければ、許しやりぬ。この者のかへりに、友どちの許へ消息送るとて、みづから落柿舎の去來と書きはじめけり。

(風俗文選)

松の樹に囲まれた家の中に住んでゐながら、松の樹の根が地中でどうなつてゐるか、はあまり考へてみたことがなかつた。美しい赤褐色の幹や、割に色の浅い清らかな緑の葉が、永いなじみ

生の喜が躍つてゐる

である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた雨が降ると、幹の色はしつとりと落着いた、潤のある鮮かさを見せる。緑の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を増して來る。雨のあとで太陽が輝きだすと、早朝のやうな爽かな氣分が、樹の色や光のうちには漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。をりふしかはいい小鳥の群が生き／＼した聲でさへづりかはして、緑の葉の間を樂しさうに往來する。それが私の親しい松の樹であつた。

然るに、或時私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩してゐる所に佇んで、砂の中にくひこんだ複雑な根を見ることが出來た。地上の姿と地下の姿が何とひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、それに比べて、地下の根は、戦ひ、もがき、苦しみ、精一杯の努力

まぎ／＼と見た

自分の心臓で感じた

を盡したやうに、枝から枝と分れて、亂れた女の髪の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數をもつて、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つてはゐた。しかしそれを目の前にまぎ／＼と見た時には、思はず驚異の情に打たれぬわけにはゆかなかつた。私は永いなじみの間に、このやうな地下の苦しみが、不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓で感じたことはなかつたのである。彼の苦しみの聲を聞いたのは、時をりに吹く烈風の際であつた。彼の苦しさを顔を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。しかしその叫聲や、しをれた顔も、その時さへ過ぎれば、すぐにもとの快活に返つて、苦しみの痕をめつたにあとへ残さない。しかも彼等は、我々の眼に秘められた地下の營みを一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、

秘められた

このやうな苦  
勞の上にのみ  
可能なのであ  
つた

五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこのやうな苦勞の上  
にのみ可能なのであつた。  
この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親  
しみを感じるやうになつた。彼等は我々と共に生きてゐるので  
ある。それは誰でも知つてゐることだが、私には新しい事實とし  
か思へなかつた。

或年、私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた時  
に、數知れず立並んでゐるあの太い檜から、何ともいへぬ莊嚴な  
心持を押しつけられた。なるほど、これは靈山だと思はずにはあ  
られなかつた。この地を選んだ弘法大師の見識にもつくづく敬  
服するやうな氣持になつた。

それは、外郭に連なる山々によつて、平野から切り離された急  
峻な山の斜面である。幾世紀を経て來たかわからない老樹たち

高野山

和歌山縣にあ

り、山中に眞

言宗古義派の

總本山金剛峰

寺がある。

不動坂

北方から高野

山に登る道の

途中にある。

この登山道に

は、今、電車・

ケーブルカー

の便がある。

金剛不壞

樹々の間に漂  
うてゐる生々  
の氣

は、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどな、どつしりとした、  
迷のない、壯大な力強さをもつて、天を目ざして直立してゐる。さ  
うして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた／＼と人間の肌  
にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。  
私の眼はすぐに老樹の根に向つた。地下の烈しい營みは、既に  
地上一尺の所に明らかに現れてゐる。土の層の深くないらしい  
この山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へるために、太い強靱な  
根は力限り四方へひろがつて、地下の岩にしつかりと抱きつい  
てゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は一體どんなで  
あらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に  
複雑にからみあつてゐる有様は、想像するだけで我々に驚異の  
情を起させる。確かに山は烈しい生の力の營みによつて、残ると  
ころなく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見

隠れた努力の  
威壓  
神祕の影さへ  
帯びて

ることは出来なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出来た。隠れた努力の威壓が、神祕の影さへ帯びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に、根の浅い自分を恥ぢた。さうして地下の營みに没頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遅くはない。成長を欲する者は、まづ根を確におろさなくてはならぬ。上に伸びることをのみ欲するな。まづ下にくひ入ることを努めよ。

古來の偉人には、雄大な根の營みがあつた。それ故に彼等の仕事は、味はへば味はふほど、深い味はひを示して來る。

現代人は、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすれば、それが小さい植木鉢の中の仕事に墮してゐはしないか。

墮してゐる

天を衝かうとするやうな大きな願望はいぢけた根からは生れるはずがない。  
偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬であることを考へてみなければならぬ。  
(偶像再興)

九 新聞社

土岐善麿

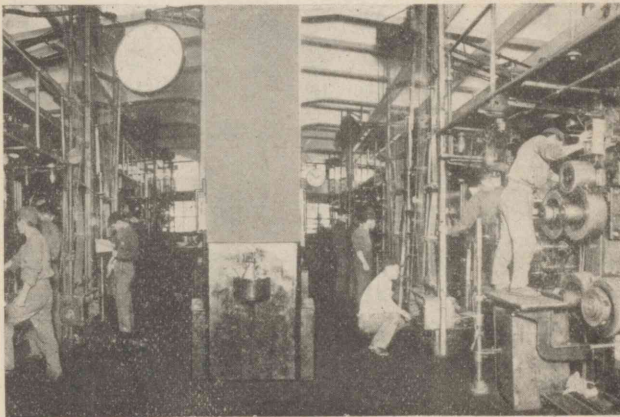
土岐善麿  
歌人、東京朝  
日新聞記者、  
東京市の人、  
明治十八年生。

「ごう／＼ごう／＼」と、遠い地鳴のやうな響をたてて、輪轉機が廻りはじめた。それは、同じ建物の中にあるのだが、全體が鐵骨コンクリートのがつしりとした建物なのと、階が違ふのと、相當離れてゐるのとのために、編輯室までは、耳を聳するほどの騒然たる雜音とはなつて來ない。むしろ今までの編輯室の烈しい緊張と興奮と、軽い疲労とを穩かに慰めるやうな、全身に電氣按摩でもかけてゐるやうな快感を誘ふ。一片づきしたあとの安心と、一

快感を誘ふ



ニュースセン  
ス  
新しい消息を  
察知する官能



高速度輪轉機

種の得意と、それから、かうして印刷されつゝある清新な紙面が、  
間もなく讀者の手に渡り、その眼に  
觸れて、その感覺、その思想にしみこ  
む異常な期待、――夕刊は今あの高  
速度の輪轉機の爽快な飛躍の中に、  
時代へ、社會へ、大きな「力」となつて、刻  
刻に發散する……。

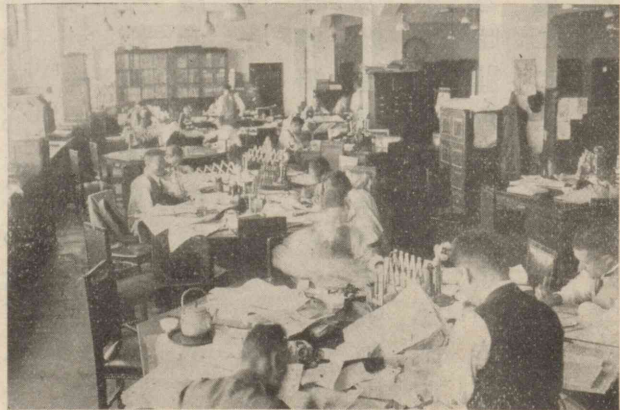
よりは、ニュースセンスの連續なのだ。夕刊とか朝刊とか、更にそ  
かうして夕刊が出てしまふ。その  
時は、もうすぐ朝刊のために、編輯室  
にはまた新しいニュースセンスが  
敏速明快に働いてゐる。またといふ

四六時中

デスク  
編輯室内では、  
かく稱してゐ  
るので、ここ  
ではむしろ卓  
と譯すべきで  
ある。

の夕刊朝刊の第一版から最後の市内版まで、その區劃はたゞ「締  
切」の時間の關係に過ぎない。ニ  
スは晝夜を分たず不斷に發生し、記  
者のセンスは四六時中、不休に轉回  
してゐるのだ。

隅から隅まで殆ど見わたしのつ  
かないほど大きな編輯室、その中央  
の窓際の明るい所に、一坪以上もあ  
る八角のデスクを据ゑて、おびたゞ  
しい原稿に忙しく幾人かが赤イン  
クを走らせてゐる。そこは整理部だ。  
各方面の記者によつて作製された原稿は、殆どすべてこの卓上



編輯室

に集まつて、手際よく、あの幾頁の紙面に按排され、整理される。この整理部に接して、社會部、政治部、經濟部などの大デスクが据ゑられてゐる。皇室の御事をはじめ、社會一般のニュース、警察も、裁判も、天變地異も、思想問題も、趣味生活も、衛生も、凡そ社會的意義あるもの、一般的興味あるものは悉く社會部が扱ふ。その範圍の廣さ、仕事のせはしさは想像以上だ。

政治のことは政治部、經濟部、かういへば至極簡單のやうだが、政治といつても一般の政治問題、政治現象の中に、産業政策、社會政策、教育文化の施設、外交などと細かに専門記者が配屬されるし、議會の開かれてゐる時、開かれてゐない時、平時、非常時、いはゆる天下國家のことは皆ここで扱はなければならぬ。

經濟にしても、大藏、農林、商工、逓信、鐵道の各省に關する公經濟

スポーツマン

運動家としての道にかなつた立派な精神。

校閲部

出来上つた記事を校閲する部。

調査部

新聞編輯に必要な圖書・寫眞等を調査保存する部。

記事審査部

誤報などを審査する部。

聯絡部

姉妹新聞をもつてゐる社に於て、互に事務・通信の聯絡に當る部。

通信部

國內の通信員などから送つて來る通信を取扱ふ部。

から、私經濟としては金融、爲替、海運、陸運、保險もあれば、瓦斯、電氣もあり、産業組合から經濟上の諸團體にわたるほか、株式、米穀、その他の市場の商況が細かい數字になつて展開する。

スポーツ隆盛の健康な時代のために、運動部が記事の上にもスポーツマンシップを發揮する一方には、洋の東西、地球上の要所所に配置した通信機關によつて、全世界の情勢を洩らすところなく、集約する外報部があり、東亞部がある。

校閲部がある。學藝部がある。調査部がある。記事審査部がある。これ等は比較的多く、黙々たる勤務なのに反して、聯絡部や通信部は、絶えず電話によつて地方と聯絡をとる關係上、口も手も殆ど休む暇がない。

しかし外部から表面的にのぞいたのでは、編輯室の情景ぐら

閑日月を味は  
つてゐる

活動の渦は層  
一層加速度に  
急旋回をなし  
て



飛 び 立 っ っ 傳 書 鳩

る雜然紛然として、しかも閑なのやら忙しいのやら、遊んでゐるのやら働いてゐるのやらわからな  
いものはあるまい。椅子にもたれて、  
すぱり／＼煙草の煙を紫に吐いて  
ゐるものが、必ずしも閑日月を味は  
つてゐるのでなく、笑つてゐるやう  
な顔が、悉くをかしいのでもなく、突  
然大きな聲を放つたのが、別に腹を  
立ててゐるのでもない。  
たゞ一たび重大事件が起つた、突  
發事件があるとすると、その活動の  
渦は、層一層、加速度に急旋回をなし  
て、これ等の諸機關が一齊に、その事件に集中され、統一され、綜合

論說委員  
社説を草する  
委員。

新聞の紙面に  
よる以外云々  
たとへばニュー  
ス映畫の公  
開、展覽會・  
講演會の開催  
の如きである。  
報道の歡喜に  
亂舞してゐる

處世の試煉

〔禁轉載〕

される。論說委員たちは、これに對する態度方針を決定するため  
に會合する。號外發行のベルがけた、ましく響きわたる。寫眞部  
の暗室からは、まだ濡れたまゝの新しい印畫が、あとから／＼と  
編輯室のデスクに運ばれる。航空部は飛行準備をととのへる。計  
畫部は新聞の紙面による以外、讀者の前にその情景を傳へるた  
めの奉仕的作業に就く。見よ、あの可憐な傳書鳩までが、幾百羽、社  
屋の塔上高く、報道の歡喜に亂舞してゐるではないか。

遺漏なき平生の用意と、分秒を争ふ應急の獻身と、判斷と、勇氣  
と、注意力と、健康と、新聞社はそのまゝ、人生だ。處世の試煉だ。輪轉  
機のとゞろきは、まだやまない。それは、さながら人生と文化の行  
進曲とも聞える。

夏目漱石  
名は金之助、  
作家、東京市  
の人、大正五  
年歿、年五十  
クラバム、ジャ  
ンクシオン  
ロンドンの西  
南部にある停  
車場。

一〇 ロンドンの霧

夏目漱石

昨宵は夜中枕の上で、ばち／＼いふ響を聞いた。これは近所に  
クラバム、ジャンクシオンといふ大ステーションのあるお蔭で  
ある。このジャンクシオンには、一日のうちに汽車が千幾つか集  
まつて来る。それを細かに割りつけてみると、一分に一列車くら  
ゐづつ出入りをするわけになる。その各列車が霧の深い時には、  
何かの仕掛で、ステーション間際へ來ると、爆竹のやうな音をた  
てて合圖をする。信號の燈火は青でも赤でも全く役に立たない  
ほど暗くなるからである。  
寢臺を這ひ下りて、北窓の日蔽を捲き上げて、外面を見おろす  
と、外面は一面に茫としてゐる。下は芝生の底から、三方煉瓦の塀  
に圍はれた一間餘の高さに至るまで、何も見えない。たゞ空しい

ゴシック  
建築様式の一、  
鋭く尖つたや  
うな形のもの。

ものが一杯詰つてゐる。さうしてそれがしんとして凍つてゐる。  
隣の庭もその通りである。この庭には綺麗な芝生があつて、春さ  
きの暖い時分になると、白い髻をはやしたお爺さんが日向ぼつ  
こをしに出て來る。その時、このお爺さんは、いつでも右の手に鸚  
鵡をとまらしてゐる。さうして自分の目を鸚鵡の嘴でつゝかれ  
さうに近く、鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽ばたきをして、しきり  
に鳴きたてる。お爺さんの出ない時は、娘が長い裾を引いて、絶間  
なく芝刈器械を芝生の上に轉がしてゐる。この記憶に富んだ庭  
も、今は全く霧に埋まつて、荒れはてた自分の下宿のそれと、何の  
境もなくのべつに續いてゐる。  
裏通を隔てて向側に高いゴシック式の教會の塔がある。その  
塔の灰色に空を刺す天邊で、いつでも鐘が鳴る。日曜は特に甚だ  
しい。今日は鋭く尖つた頂は無論のこと、切石を不揃に疊み上げ

濃い影の奥に  
深く鎖された

バス  
オムニバスの  
略。乗合馬車。

た胸中さへ、ありがたがまるでわからない。それかと思ふ所が、心持  
黒いやうでもあるが、鐘の音はまるで響かない。鐘の形の見えな  
い濃い影の奥に深く鎖された。  
表へ出ると、二間ばかり先は見える。その二間を行き盡すと、ま  
た二間ばかり先が見えて来る。世の中が二間四方に縮まつたか  
と思ふと、歩けば歩くほど新しい二間四方があらはれる。その代  
り今通つて来た過去の世界は、通るにまかせて消えて行く。  
四つ角でバスを待ち合はせると、鼠色の空氣が切り抜か  
れて、急に眼の前へ馬の首が出た。それだのにバスの屋根にゐる  
人は、まだ霧を出きらずにゐる。こつちから霧を冒して、飛び乗つ  
て下を見ると、馬の首はもう薄ぼんやりしてゐる。バスが行き逢  
ふ時は、行き逢つた時だけ綺麗だなどと思ふ。思ふ間もなく色のあ  
るものは、濁つた空の中に消えてしまふ。漠々として無色のうち

ウエストミン  
スター橋  
テムズ河にか  
かる橋。  
ビッグベン  
英國國會議事  
堂の塔上にあ  
る大時計。議  
事堂はウエス  
トミンスター  
橋の西袂にあ  
る。  
ビクトリア  
ウエストミン  
スター橋から  
西南方にある  
通。  
テート畫館  
英國製糖家サ  
ーヘンリーの  
寄附によつ  
て設立された  
美術館。  
バタシー  
テムズ河の南  
岸の町。クラ  
バム、ジャン  
クシヨンから  
は西北に當り、  
程近い。

に包まれて行つた。ウエストミンスター橋を通る時、白いものが  
一二度眼を掠めて飜つた。眸を凝らして、その行方を見詰めてゐ  
ると、封じこめられた大氣  
のうち、鷗が夢のやうに  
微かに飛んでゐた。その時、  
頭の上でビッグベンが嚴  
かに十時を打ちだした。仰  
ぐと、空の中でたゞ音だけ  
がする。  
ビクトリアで用を足し



霧のロンドン

て、テート畫館の傍を河沿ひにバタシーまで来ると、今まで鼠色  
に見えた世界が、突然と四方からばつたり暮れた。泥炭を溶いて、  
濃く身のまはりに流したやうに、黒い色に染められた重たい霧

が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふほど濕つてゐる。軽い葛湯を呼吸するばかりに氣息が詰る。足もとは無論穴藏の底を踏むと同然である。

自分はこの重苦しい茶褐色の中に、暫く茫然と佇んだ。自分の傍を人が大勢通るやうな心持がする。けれども肩が觸れあはないう限りは、果して人が通つてゐるのかどうか疑はしい。その時、この濛々たる大海の一點が、豆くらゐの大きさに、どんよりと黄色く流れた。自分はそれを目あてに、四歩ばかり足を動かした。すると、或店先の窓硝子の前へ顔が出た。店の中では瓦斯をつけてゐる。中は比較的明らかである。人は常の如くふるまつてゐる。自分はやつと安心した。

バターシ―を通り越して、手探りをしないばかりに向ふの岡へ足を向けたが、岡の上は、しもた屋ばかりである。同じやうな横町

が幾筋も並行して、青天の下でも紛れ易い。自分は向つて左の二つ目を曲がつたやうな氣がした。それから二町ほどまつすぐに歩いたやうな心持がした。それから先はまるでわからなくなつた。暗い中にたつた一人立つて首を傾けてゐた。右の方から靴の音が近寄つて來た。と思ふと、それが四五間手前まで來てとまつた。それからだん／＼遠のいて行く。しまひには全く聞えなくなつた。あとはしんとしてゐる。自分はまた暗い中にたつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるか知らん。  
(永日小品)

一一 柿くへば

紅梅の落花をつまむ疊かな

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

犬が來て水のむ音の夜寒かな

子規

同

同

子規  
本姓名は正岡  
常規、松山市  
の人、明治三  
十五年歿、年  
三十六。

松山布衣人子  
規人トテリ  
ホトトギスヲ  
カセニキタコト  
イノオカト  
俳人 文章

鳴雪 短夜を授兵急  
く山路かな

鳴雪 本姓名は内藤  
素行、松山市  
の人、大正十  
五年歿、年八  
十。

鬼城 本姓名は村上  
莊太郎、高崎  
市の人、明治  
三年生。

石鼎 本姓名は原鼎  
島根縣の人、  
明治十九年生。

松宇 本姓名は伊藤  
半次郎、長野  
縣の人、安政  
六年生。

酒竹 本姓名は大野  
豐太、東京市  
の人、大正二  
年歿、年四十

瓊音 本姓名は沼波  
武夫、名古屋  
市の人、昭和  
二年歿、年五  
十一。

醒雪 本姓名は佐々  
政一、文學博  
士、京都市の  
人、大正六年  
歿、年四十六。

竹冷 本姓名は角田  
眞平、静岡縣  
の人、大正八  
年歿、年六十  
四。

早春の庭をめぐりて門を出でず  
晩涼や池の浮草皆動く  
桐一葉日當りながら落ちにけり

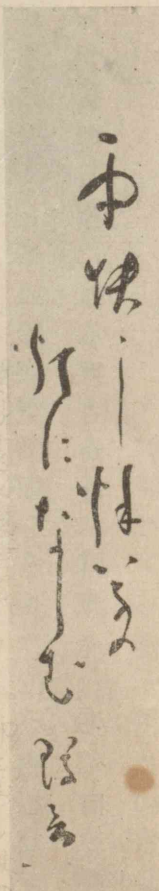


同 同 虛子

元日や一系の天子不二の山  
五月雨のをりくくわつと野山かな  
我が聲の吹き戻さるゝ野分かな  
ゆさくと大枝ゆるゝ櫻かな  
小鳥この頃音もさせずに來てをりぬ  
閑さや畑打つ人の咳拂  
椋鳥の大群黙す樹上かな

同 鳴雪  
同 同  
同 鬼城  
同 石鼎  
同 同

薄靄に旭は包まれて雉子の聲  
草市の一夜露けき都かな  
なるふたつあとを揺らるゝ牡丹かな  
立秋の大鐘つくや瘦法師  
垣越しに隣の灯影夏近し



同 松宇  
同 同  
同 酒竹  
同 瓊音

障子しめて秋の夜となる一間かな  
青麥に浮雲ちぎれくかな  
涼しさや下駄引きずつて寺の門  
腹ばうて西瓜に集ふ残暑かな  
元日や我は日本に生れたり

同 同 醒雪  
同 同  
同 竹冷

麥人

本姓名は星野  
仙吉、東京市  
の、明治十  
年生。

小波

本姓名は巖谷  
季雄、東京市  
の、昭和八  
年、年六十

乙字

本姓名は大須  
賀績、福島縣  
の、大正九  
年、年四十

長塚節

歌人、作家、  
茨城縣の、  
大正四年、  
年三十七。

埃を捲いて來  
る疾風

水はりて春を田に見る日ざしかな

竹冷

星涼し寝るを惜しみて立つ門に

麥人

新月や草にこそつく蟹の音

同

砂山の擬戦に煙る小春かな

小波

大雪の海に消えこむ静かさよ

同

沖雲の全くとちぬ餘寒空

乙字

千足袋の日南に氷る寒さかな

同

一三 田園の春秋

長塚節

一 春

春は空からさうして土から微かに動く。毎日のやうに西から埃を捲いて來る疾風が、どうかするとはたとまつて、空際にはふわ／＼とした綿のやうな白い雲が、ほつかりと暖い日光を浴

びようとしてわづかに立ちのぼつたといふやうに、動きもしないでじつとしてゐることがある。水に近い濕つた土が、暖い日光を思ふ一杯に吸うて、その勢ひづいた土の微かな刺激を根に感



長塚節 (筆穂百福平)

ぜしめるので、田圃の榛の木のおちみな蕾は、目に立たぬ間に少しづつ伸びて、ひら／＼と動き易くなる。その刺激から、蛙はまだ蟄居の状態にありながら、稀にはそつちでもこつちでもく／＼と鳴き

だすことがある。

空からさす日の光はそろ／＼と熱度を増して、土はそれを幾らでも吸うてやまぬ。土はすべてをだん／＼と刺激して、堀のほとりには蘆やその他の草が空と相映じて、すつきりとその首を



軟かさに満たされた空氣

長い睡眠から復活した

もたげる。軟かさに満たされた空氣を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひら／＼とやまず動きながら、煤のやうな花粉を撒き散らしてゐる。蛙は假死の状態から離れて、軟かな草の上に手をついては、驚いたやうな様子をして空を仰いで見る。さうして彼等はあわてたやうに聲を放つて、その長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騒がしい聲は、たゞ空にのみ響いて快げである。

彼等は更に春の到つたことを一切の生物に向つて促す。草や木が心づいて、その活力を存分に發揮するのを見ないうちは鳴くことをやめまいと努める。田圃の榛の木は、とうに花を捨てて、自分が先に若葉の姿になつて見せる。黄色みを含んだ若葉が、爽かて且朗かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだたゆたうてゐる周圍の林を見る。岬のやうな形に偃うてゐ

本性のままに

居を求め  
空を占めて  
空間を支配してゐる

る水田を抱へて、周圍の林は漸くその本性のままに、勝手に白つぼいのや、赤つぼいのや、黄色つぼいのや、いろ／＼に茂つて、それが氣がついた時に急いで一つの深い緑になるのである。雑木林のそこらこころに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、恥づかしさうに葉の間からこつそりと四方をのぞく。雑木林の間にはまた芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒の下に居を求めると、雲雀が、時々空を占めて、春が更けたと喚びかける。さうすると、その同族の聲のみが空間を支配してゐるべきはずだと思つてゐる蛙は、そのさへづる聲を壓し去らうとして、互の體を飛び越え飛び越え鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては、蛙の鳴かぬ日中のみ、これを仰げばまばゆさに堪へぬやうにその身を遙かにきらめく日の光の中

鳴き誇つて

に没して、その小さな喉のちぎれるまでは劇しく鳴かうとするのである。蛙はいよゝますゝ鳴き誇つて、樫の木のやうな大きな常磐木の古葉をも一時にかりりと落さねばやむまいとする。

二 秋

秋だ。

いづれの梢も、繁茂する力がその極度に達して、そこに凋落の面影が微かに浮んだ。毎日透徹した空を、じりゝと軋りながら、高熱を放射しつゝあつた日も、あまりに長い晝の時間に倦んで、空とさうして地上のすべてが漸く變調を呈した。心もとなげな雲がむらゝと南から駈け走つて、その度ごとに驟雨をざあと斜に注ぐ。驟雨は後からゝと降つて來るので、夜の白まぬうちから麥を搗いて、庭一杯に筵を干した百姓を、うるさくいぢめた。

じりゝと軋りながら高熱を放射しつゝあつた日

みじめ

土地でいふその降つかけは、一日でやまねば三日とか五日とか必ず奇數の日で終つた。降つかけが來てから、瓜畑は蔓も葉も悉くがらゝに枯れて、みじめになつてしまつた。

極めてそつと、しかも騒がしさうに動く雲が、高く低く反對の方向に走ると共に、枯燥しかけた草木の葉が相觸れ相打つては、だんゝと破れつゝ、ざわゝと悲しげな響をたてて鳴つた。妻いほど互えた夜の空には、忙しげな雲が、月を吞んですぐにうしろへ吐き出し吐き出しつゝ走つた。月は反對に走りつゝ逃げた。秋風だ。櫟や楡や、すべての木がたしなみを失つて、ざあつと吹かれて、たゞ騒いだ。夜は寂しさにすべての梢が相さゝやきつゝ餘計に騒いだ。

まだ暑い空氣を冷たくしつゝ、豪雨が更に幾日か草木の葉をいぢめては降つてゝまた降つた。例年のやうな季節の洪水が、

降つてゝまた降つた

鬼怒川  
源を栃木縣の  
西北山中に發  
し、千葉縣に  
入つて利根川  
に注ぎ、太平  
洋に入る。

残酷に河川の沿岸をねぶつた。洪水の去つた後は、ちやうど精神の過激な疲勞から俄に老衰した者のやうに、草木は皆半死の狀態を呈して、その力ない葉先を秋風に吹き靡かされた。鬼怒川の土手に繁茂した篠の根にまつはつてゐる短い露草は、葉も莖も泥にまみれてゐながら、なほ生命を保ちつゝ、日ごとにあはれげな花をつけた。蟋蟀がめいるやうにその蔭で鳴いた。空を遙かに飛んでゐた椋鳥の群が、幾つかに分れて低く飛び、梢を求めてぎいぎいと鳴きつゝ、落着かなかつた。荒れた藪の端や、土手の瘠せた篠の梢に乗りかゝつて、これを噛めば齒がこぼれるといはれてゐる毒な仙人草が、その手を延ばし、白い花を一杯につけて、さうして、活き／＼としたものは自分のみであることを誇るものやうに、秋風に吹かれつゝ、ふわ／＼と動いた。

(主)

相馬御風

名は昌治、評論家、新潟縣の人、明治十六年生。

一三 人間的情味

相馬御風

同じく山の芋をもらふにしても、むき出して持つて来てくれるよりは、昔ながらに芋殻や藁の苞の中に入れた方が、少しくらゐ量が少くても嬉しさが違ふ。また味はいづれにしても、後者の方が何となくうまいやうな氣がする。罐詰の山葵漬よりは、昔ながらの青い竹のたがのはまつた小さな桶に入れてある方が遙かにうまく感ずる。

自然味を主とする食物などの包装は、やはり自然の味を保つたものの方がいい。物の味は必ずしも内容のみのものではないやうである。人間の服装などにも、この呼吸が大切のやうに思はれる。

物の包装の變遷一つにも、人間のさまざまな心理の推移のあ

味はふべき言葉

ること心に心をとめてほしい。

「新しい疊の香を喜ぶ日本國民は、家の中にゐても、野の新鮮な香を喜ぶ國民である。」といふやうなことを誰やらがいつた。味はふべき言葉である。私は新しい蓆の香も好きである。それには豊かな田のみのりの薫りがある。

獸の皮の肌ざはりを喜び、油を塗つた敷物の清潔を喜ぶのと、疊や蓆や蓆がほんのりと家のうちに漂はす野の香を喜ぶのとでは、大變な性情の相違がある。そしてその相違は、おのづから精神生活の相違までも暗示してゐる。

田舎ですらも、昔の駄菓子が年一年影をひそめて行きつゝ、あつて、いはゆる改良された新種に占領されてゆく。

つい先頃も、山の畑へ桑の實を食ひに行つて來たと見えて、口

のあたりを紫色にした子供の群に逢つて、つく／＼そのことを思つた。茅花を抜きに行く子供、零餘子を拾ひに行く子供なども、今では田舎にだん／＼少くなつた。しまひにはさうしたものの食用に適するといふことすら忘れてしまふやうになるのではないか。

私たちの幼い頃には、海岸に立つて、沖を行く汽船や大きな和船の姿を見ると、みんな聲を揃へてそれに呼びかけたものである。聲の届かないことは無論であるが、その頃は、みんな一緒に出来るだけ大きな聲を張り上げて呼べば、船へ聞えるものやうに思つてゐた。そして何となく船の方でも自分たちの聲に答へてゐてくれるやうにさへ思つた。

「大船や――」

「まめどれや――」

「まめどれや  
「まめでをれ  
や」の訛で、  
無事で航海せ  
よの意。

これは和船に對した場合。

「蒸氣

まめどれや——」

これは汽船に對した場合。

私たちはそれをやるせない情味をこめて叫びつゞけたものであつた。

しかし今の子供は、飛行機が飛んで來ても、さほど驚きもせず、珍しがりもせず、また乗つてゐる人に對して懐かしみを感じもしなくなつた。

進歩といへば進歩でもあるが、人間的情味の上からは何となくさびしい。しかしこんな風に感ずるのも、私自身が既に古くなつたからかも知れない。

(砂に坐して語る)

やるせない情味

吉田兼好

本姓は卜部。吉野朝時代の歌僧、京都の人、正平五年、年六十八。

石清水

石清水八幡宮。今、京都府八幡町の男山の山上に鎮座する官幣大社。祭神は應神天皇・神功皇后・比咩大神。極樂寺・高良共に男山の麓にある八幡宮の末社。

ほい  
あらまほしきこと

一四 仁和寺

吉田兼好

一 先 達

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、或時思ひたちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺高良などを拜みて、かばかりと心得てかへりにけり。さて、かたへの人にあひて、年頃思ひつること、はたしはべりぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ参るこそほいなれと思ひて、山までは見ず。」とぞいひける。少しのこども先達はあらまほしきことなり。

二 足 鼎

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、おの

かづく

おの遊ぶことありけるに、酔ひて興に入る餘り、かたはらなる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔を差入れて舞ひ出でたるに、満座興に入ること限りなし。暫し奏でて後、抜かんとするに、大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪へ難かりければ、かなはですべきやうなく、三足なる角の上に帷子をうち掛けて、手をひき、杖をつかせ



鼎の舞

たゞ腫れに腫れみちて

がり

さこそ異様なりけめ

て、京なる醫師のがりゐて行きけるに、道すがら人の怪しみ見ること限りなし。醫師の許に差入りて、むかひゐたりけんありさま、さこそ異様なりけめ。ものをいふにも、くゞもり聲に響きて聞えず。かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし。といへば、また仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など、枕上に寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやう、たとひ耳、鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力をたてて引き給へ。とて、藁のしべをまはりに差入れて、金を隔てて、首もちぎるゝばかりに引きたるに、耳鼻缺けうげながら、抜けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

三 猫また

「奥山に猫またといふものありて、人を食ふなる」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも、猫のへあがりて猫またになりて、

行願寺  
京都一條の北  
にあつたが、  
今は寺町に移  
つてゐる。  
心すべきこと  
にこそ

松どもともし  
て

人とすることはあなるものを。といふものありけるを、何阿彌陀佛

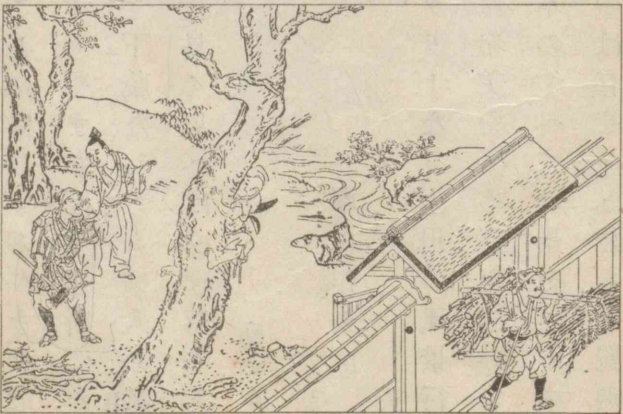


とかや、連歌しける法師の、行願寺の  
ほとりにありけるが聞きて、一人あ  
りかん身は心すべきことにこそと  
思ひける頃しも、或所にて夜更くる  
まで連歌して、たゞ一人歸りけるに、  
小川のはたにて、音に聞きし猫また、  
あやまたず足のもとへふとより來  
て、やがて搔きつくまゝに、頸のほど  
を食はんとす。肝心もうせて、防が  
んとするに力もなく、足も立たず、小川  
へころび入りて、助けよや、猫またよ

のわたりに見知れる僧なり。こはいかに。とて、川の中よりいだき  
起したれば、連歌の賭物とりて、扇小  
箱など懐に持ちたりけるも水に入  
りぬ。希有にしてたすかりたるさま  
にては、ふくゝ家に入りけり。飼ひ  
ける犬の、暗けれど主を知りて、飛び  
つきたりけるとぞ。

四 高名の木のぼり

高名の木のぼりといひし男、人を  
おきて、高き木にのぼせて、梢を切  
らせしに、いと危く見えしほどは、い  
ふこともなくて、おるゝ時に、軒だけ  
ばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ。」と言葉をかけはべ



高名の木のぼり

聖人の誠めに  
かなへり

りしを「かばかりになりては、飛びおるゝともおりなん。いかに  
くいふぞ。」と申しはべりしかば、そのことに候。目くるめき、枝危き  
ほどは、おのれが恐れはれば申さず。あやまちは易き所になり  
て、必ず仕ることに候。といふ。あやしき下藤なれども、聖人の誠め  
にかなへり。鞠も難き所を蹴出して後、易く思へば、必ず落つとは  
べるやらん。

(徒然草)

藤岡作太郎

號は東圃、國  
文學者、文學  
博士、金澤市  
の人、明治四  
十三年歿、年  
四十一。

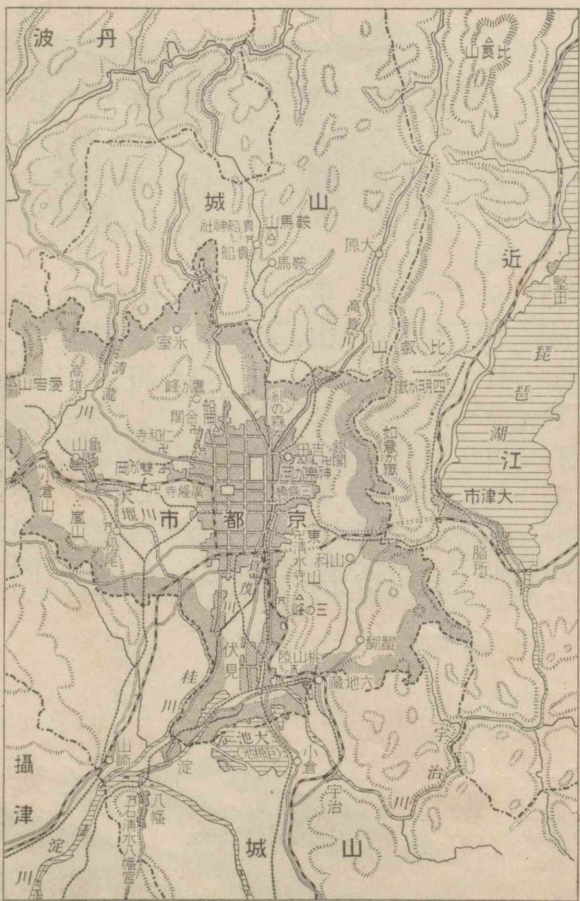
エキス  
エキストラク  
トの略。粹を  
ぬいたもの。

### 一五 平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞のイタリイなり。山川の風景行く  
所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚め、群を抜いて立  
てるを京都とす。京都附近の景は、日本のすべての景をエキスに  
したるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずと雖も、秀麗幽婉  
の形態は備へざるなし。東に近く比叡如意が嶽より三の峰まで、

東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬貴船氷室鷹が峰高雄の山



地勢は窮まる

て地勢は窮まる。松柏の緑、色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻  
の入りまじるあり、或は紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり。一面

山波濤の如く、西にや  
や隔りて愛宕  
小倉龜山嵐山  
松尾より山崎  
に至り



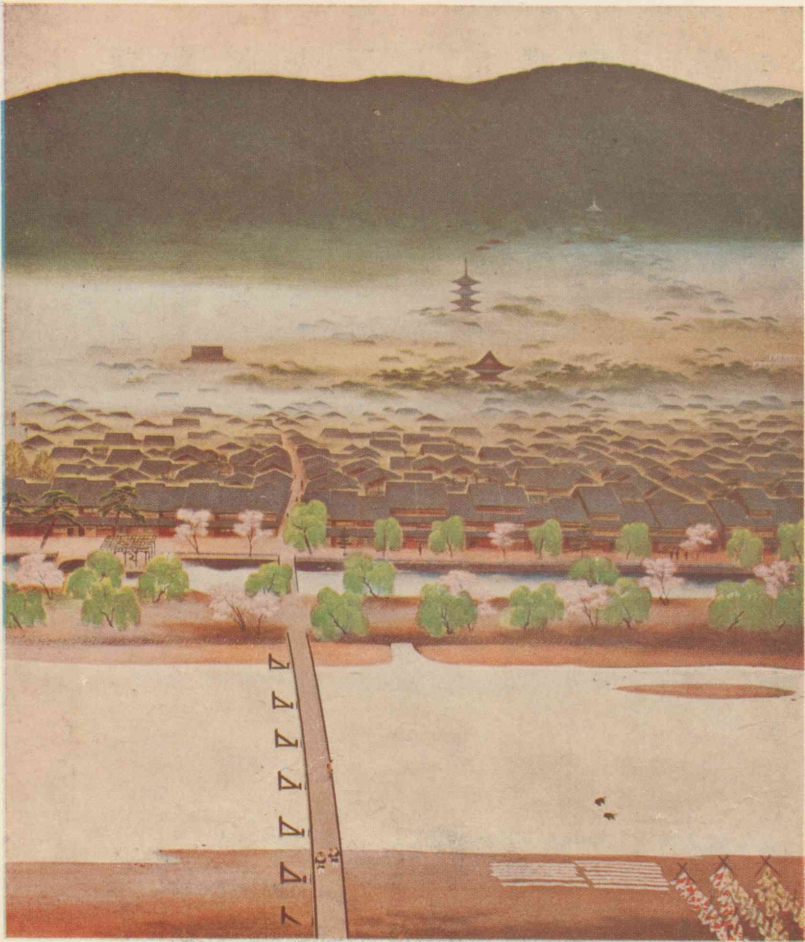
の草の頂なる四明が嶽春なほ雪白き比良の遠山などはわけて  
 朝日・夕日に照り映ゆる色の千變萬  
 化なるぞおもしろき。東の神樂が岡  
 北の船岡、西の雙が岡は、大和の畝傍  
 香具山・耳成の三山の如く、近く相並  
 びてあらねど、子の日の遊に小松引  
 く樂しみなど、いづれ劣らぬ所がら  
 南にやゝ隔りて男山これに對し、國  
 家鎮護の八幡宮、宮柱太しりまして、  
 仰ぐも畏し。

珠を碎き去る

京の東端に沿うて、賀茂川の流  
 れの河合に高野の支流を集めて、南に  
 珠を碎き去り、西に少しく離れて、桂川・大堰の激湍に清瀧を合は



四明が嶽



洛東 松元道大筆

琴の音涼しく

せて、琴の音涼しくまた南に向ふ。二川南に合し、更に淀の急流に流れこみて、沈々として西の方難波をさして走る。

長所なくんば  
あらず

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるもの少しと雖も、一面よりいへば、山のうちにこもりて、海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配や、や急なれば、蘆間に出て入る白帆の、町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の礦物を含めるにや、晒す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸にうち上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などをる所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしと雖も、海なくして清き京都はますく清きなり。

山紫水明の語は、よく京都の景色をいひ表せり。いづこの山水

説明を須ひずとも明らかなるべし

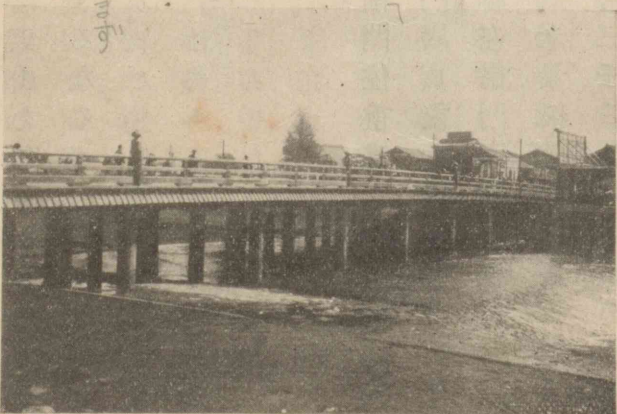


も、日中よりは朝夕の姿態のおもしろきは、水蒸氣の然らしむるところなるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。かつて一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、波俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なり、て海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か、世界はたゞ一暗黒の中に没し去るか、と疑はれて、すさまじかり

髣髴として眼前にあるを覺ゆ

三條大橋  
挿繪に見える橋は、昭和十年六月、洪水のために流失してしまつた。あるかなきかの夢

き。かくの如く壯絶なる景は、我が數年の滯留中、終に京都にては見ることを得ざりしところなり。されど下京より吉田に通ひたる朝な朝な景色は、今もなほ髣髴として眼前にあるを覺ゆ。引きわたす霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ、かなたへかなたへと淡くなりて、向ふに寝たる東山は、あるかなきかの夢よりいまだ覺めやらず。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄を洩れ來る。時雨の景色の、またよその國には見られぬさまよ。愛宕の峰を覆ひて白く光り



橋 大 條 三

あはやと驚き  
もはてす

たる薄布の、さては時雨と思ふうちにはらくと面を撲つ。あはやと驚きもはてす、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帯の平安京の特色なり。

(國文學全史平安朝篇)

一六 待賢門の戦

一

大内へ向ふ人々には、大將軍は左衛門佐重盛、三河守頼盛、淡路守教盛、侍には筑後守家貞、子息左衛門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衛門尉盛俊、與三左衛門尉景安、新藤左衛門家泰、難波次郎經遠、同じき三郎經房、瀬尾太郎兼康、伊藤武者景綱、館太郎貞康、同じき十郎貞景をはじめとして、都合その勢三千餘騎、六波羅をうち出て、賀茂川を馳せ渡し、西の河原に控へたり。

六波羅  
賀茂川の東、  
東山の裾で、  
平清盛の邸の  
あつた所。

左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫛の匂の鎧、蝶の裾、金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締め、小鳥といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、重簾の弓持ちて、黄桃

平治物語

いしりしうらふらふまの人の心は  
すうまぬの心はまよふまの心は  
いしりしうらふらふまの人の心は  
すうまぬの心はまよふまの心は

平治物語古寫本

花毛なる馬に、柳櫻摺つたる貝鞍置かせて乗り給へり。重盛宣ひけるは、年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと、何の疑があるべき。誰かこ

平治 第七十八代二  
條天皇の御代。  
樊噲 漢の高祖の臣  
で、武勇をも  
つて聞えた。  
張良 同じく漢の高  
祖の臣で、智  
謀をもつて聞  
えた。

こに樊噲張良が勇をなさざらん。とて、三千餘騎を三手に分つて、近衛中御門、大炊御門より、大宮表へうち出でて、陽明待賢、郁芳門へ押寄せたり。

さし固め

ひしと

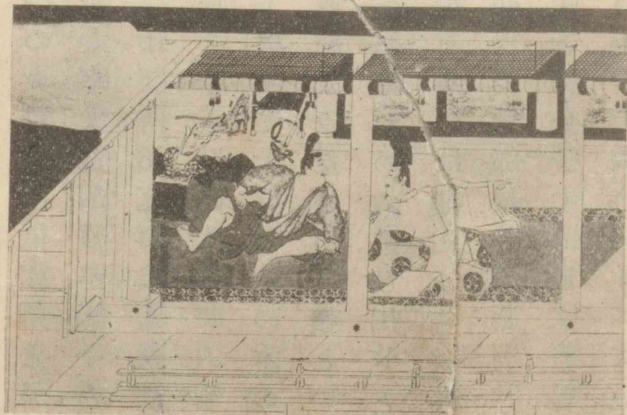
信頼

藤原氏。源義朝と共に平治の亂の主謀者。

太りせめたる  
穆王八匹の天馬  
周の穆王が驅つて天下を周遊したといふ八匹の駿馬。

大内には南西北の三方の門をさし固め、東表の陽明待賢郁芳門をば開かれたり。承明建禮の脇の小門をも共に開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺桐壺紫宸殿の前後まで兵ひしとなみりたり。これ皆源氏の勢なれば、白旗二十餘流うち立てたり。大宮表には平家の赤旗三十餘流差揚げて、勇み進める三千餘騎一度に関をどつと作りければ、大内も響きわたりておびたし。関の聲に驚きて、たゞ今までゆくしく見えられつる信頼、顔色變りて草葉の如くにて、南階を下りられけるが、膝をのゝいて下りかねたり。人なみくに馬に乗らんと引寄せさせたれども、太りせめたる大の男、大鎧は着たり、馬は大きなり、乗り煩ふ上主の心には似も似ず、はやりきつたる逸物なれば、つと出でんと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかり

にて、乗りかね給ふところを、侍二人つと寄つて、疾く召し給へ。とて押上げたり。あまりにや押したりけん、弓手の方へ乗りこして、伏しざまにどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顔に砂ひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大将とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信頼といふ不覺人は臆したりな。とて、日華門をうち出て、郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血押拭ひ、とかくして馬にかき乗せられ、待賢門へ向はれけるが、もの用にあふべしとも見えざりけり。



信頼卿 (平治物語繪卷)

もの用にあ

信賴卿と見る  
は僻目か  
桓武天皇  
第五十代

惡源太  
名は義平。義  
朝の長子。

轡を並べて

左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に残しおき、五百餘騎にて押寄せて、呼ばはり給ひけるは、「この門の大將軍は信賴卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衛門佐重盛、生年二十三」と名のりかけければ、信賴返事にも及ばず、「それ防げ、侍ども」とて引退く。大將のひき給ふ間、防ぐ侍一人もなし。我先にと逃げければ、重盛いよく勇みて、大庭の椋の木の下まで攻めつけたり。義朝これを見て、「惡源太はなきか。信賴といふ大臆病人が待賢門をはや破られつるぞや。かの敵追ひ出せ」と宣ひければ、「承り候」とて驅けられけり。續く兵には鎌田兵衛後藤兵衛佐々木源三、波多野次郎三浦荒次郎、須藤刑部長井齋藤別當岡部六彌、太猪俣小平六熊谷次郎平山武者所金子十郎足立右馬允上總介八郎關次郎片桐小八郎大夫以上十七騎、轡を並べて馳せ向ふ。大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名のれ、聞かん。かく

清和天皇  
第五十六代  
大藏

今の埼玉縣比  
企郡菅谷村の  
字。

目なかけそ

揉うだり

申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉惡源太義平、と申すものなり。生年十五歳、武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を討ちしより、この方度々の合戦に一度も不覺の名をとらず、年積つて十九歳、見參せん。とて、五百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追ひ廻し、豎ざま横ざま十文字に敵をさつと蹴散らして、端武者どもに目なかけそ。大將軍を組んで討て、櫛の匂の鎧に蝶の裾金物打つて、黃桃花毛の馬に乗つたるこそ重盛よ。押並べて組んで落ち、手捕にせよ。と、下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども、與三左衛門新藤左衛門をはじめとして、百騎ばかりが中にぞ隔りける。惡源太をはじめとして、十七騎の兵ども、大將軍に目をかけて、大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追ひ廻して、組まん組まんとぞ揉うだりける。十七騎に驅けたてられて、五百餘騎

かなはじとや思ひけん、大宮表へさつとひく。

二

平將軍 平貞盛。藤原秀郷と協力して平將門を討ち滅ぼし、武名をあげた。向ふさまにほむ。

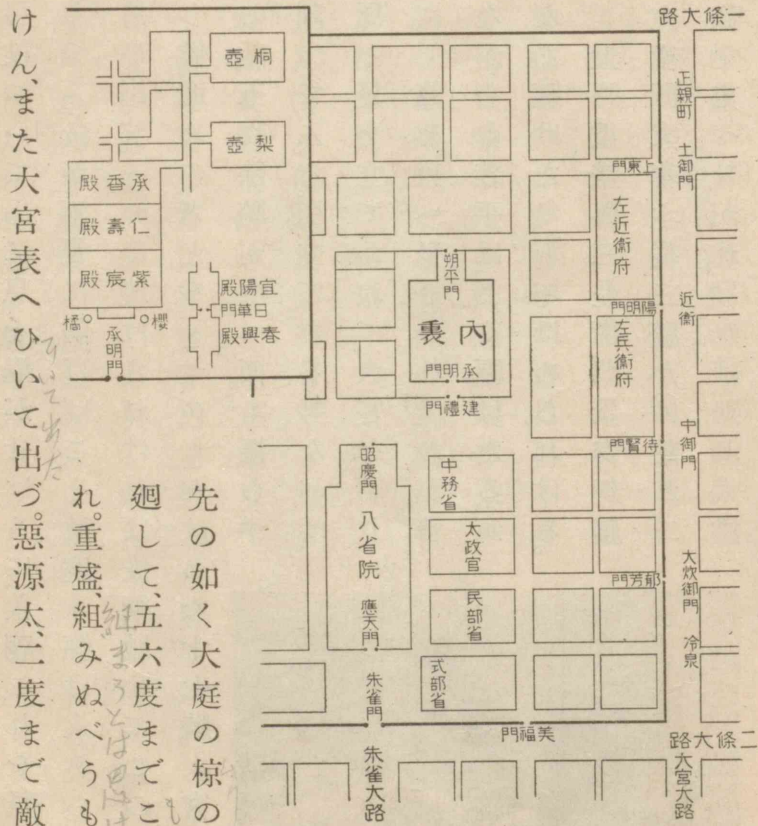
大將左衛門佐は弓杖ついて、馬の息を繼がせ給ふところに、筑後守つと參つて、曩祖平將軍の二たび生れ替り給へる君かな。と向ふさまにほめ奉れば、今一度驅けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をばとめおき、新手五百餘騎を相具して、また大庭の椋の木まで攻め寄せたり。また惡源太驅け向ひ、見まはして、いひけるは、たゞ今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は、もとの大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも、今度に於ては餘すまじ。押並べて組んで捕れ、兵ども。と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は難波次郎、同じき三郎瀬尾太郎、伊藤武者をはじめとして、百餘騎が中に隔てたるに、事ともせず、惡源太、弓をば小脇にかい挟み、鎧踏ん張り、突つ立ちあがり、左右の

かい挟み

源氏の嫡々

敵には誰か嫌はん

組みぬべうもなく



けん、また大宮表へひいて出づ。惡源太、二度まで敵を追ひまくり、

手を擧げ、幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん。寄れや、組まん。といふまゝに、

面も振らず割  
つて入る

弓杖ついて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を  
もつて、汝が不覺に防げばこそ、敵度々驅け入るらめ。あれ速かに  
追ひ出せ。といひ遣はされければ、俊綱馳せてこの由をいふに、承  
り候。進めや、者ども。とて、色もかはらぬ十七騎、大宮表に驅け出で  
て、敵五百餘騎が中へ面も振らず  
割つて入る。引立てたる勢なれば、  
馬の足を立てかねて、大宮を下り  
に二條を東へひきければ、我が子  
ながらも義平は、よく驅けたるか  
な。あ、驅けたり。とぞほめられける。

大將重盛與三左衛門景安新藤  
左衛門家泰、主從三騎かけ離れ、二  
條を東へひかれければ、惡源太、鎌



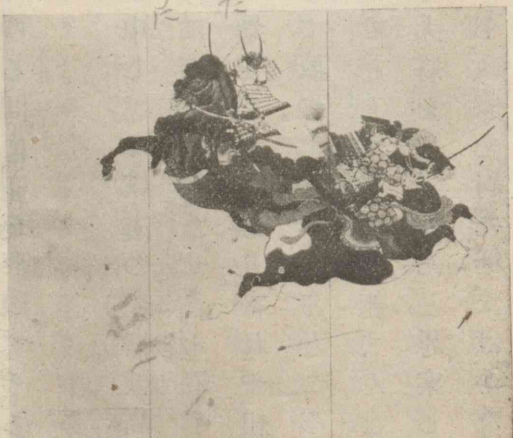
と盛重

堀河  
今の京都市洞  
院通と大宮通  
との間に通ず  
る溝。

よつびいてひ  
やうと射る

ござんなれ

田にきつと目合はせて、ここに落  
つるは大將とこそ見れ返せや。と  
て追つかけたり。既に堀河にて追  
ひ詰めるが、弓手の方に材木多  
く充ち満ちたるに、惡源太の乗り  
給へる馬、かたなづけの駒にて、材  
木にや驚きけん、馬手の方へけし  
飛んで、小膝を折つてどうと伏す。  
鎌田兵衛延ばさじと、十三束取つ  
て番ひ、よつびいてひやうと射る。重盛の射向の袖にはたと中り  
て飛び返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちやうと中つ  
て、篋かづき碎けてはね返れり。惡源太、これは聞ゆる唐皮といふ  
鎧ござんなれ。馬を射て、落ちんところを討て。と下知せられけれ



(筆音朝堀小) 平 義



ば、またよつびいて追ひざまに筈の隠るゝほど射こみたり。馬は  
屏風を返す如く倒るれば、材木の上にはね落され、兜も落ちて、大  
童になり給ふ。鎌田、堀河を馳せ越えて、重盛に組まんと落ちあふ。  
重盛、近づけてはかなはじとや思はれけん、弓の弾にて鎌田が兜  
の鉢をちやうと突く。突かれてゆらゆる間に、兜を取つてうち着  
つゝ、緒を強くこそ締められけれ。

與三左衛門馳せ寄つて、中に隔り申しけるは、漢の紀信は高祖  
の命に代りて、滎陽の圍みを出し、終に天下を保たせき。主辱めら  
るゝ時は臣死す。といふにあらざや。景安ここにあり。寄れや、組ま  
ん。といふまゝに、鎌田兵衛と引組んで、取つて押へけるところに、  
惡源太、馬を引起し、これも堀河を馳せ越えて、重盛に組まんと飛  
んでかゝりけるが、鎌田をや助くる、大將をや討たんと思案しけ  
れども、大將にはまたも寄せあふべし、政家を討たせてはかなは

高祖 姓は劉、名は  
邦。今の支那河南  
省。主辱めらるゝ  
時は云々  
「范蠡曰く、人  
の臣たる者は  
君憂ふるとき  
は臣勞し、君  
辱めらるれば  
臣死す。」(國  
語)

虎口を遁る

なからましか  
ば

十二月二十七  
日  
平治元年。

じと思ひ、與三左衛門に落ちあうて、三刀刺して首を取る。重盛は、  
たのみきつたる景安討たせて命生きて何かせんとして、既に惡源  
太と組まんとせられけるを、新藤左衛門馳せ來り、家泰が候はざ  
らん所にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。とて、我が馬を  
引向け、中に隔てて惡源太とむずと組む。政家は重盛に組まんと  
しけるが、主を討たせてはかなはじと思ひければ、新藤左衛門に  
落ち重なつて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて、六波羅ま  
でぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助かり難き命なり。  
十二月二十七日の巳の刻ばかりのことなるに、一村雨さつと  
して、風は烈しく吹きたりけり。鎌田が鞍の前輪にも、氷柱いたれ  
ば、乗りかねたり。惡源太これを見給ひて、手形をつけて乗れや。と  
宣ひければ、打物抜いて、つぶくと手形を切つてぞ乗つたりけ  
る。鞍に手形をつくること、この時よりぞ始まれる。(平治物語)

長田幹彦 ながた みきひこ  
作家、東京市  
の人、明治二  
十年生。

一七 落 日

長田 幹彦

孤影を追うて  
さすらひ行く  
狩勝峠  
北海道の中央  
部、石狩國と  
十勝國との境  
にある峠。  
十勝

北海道の東南  
部にあり、太  
平洋に面する  
國。釧路國は  
その東に隣つ  
てゐる。  
釧路  
釧路國の太平  
洋岸にある市。

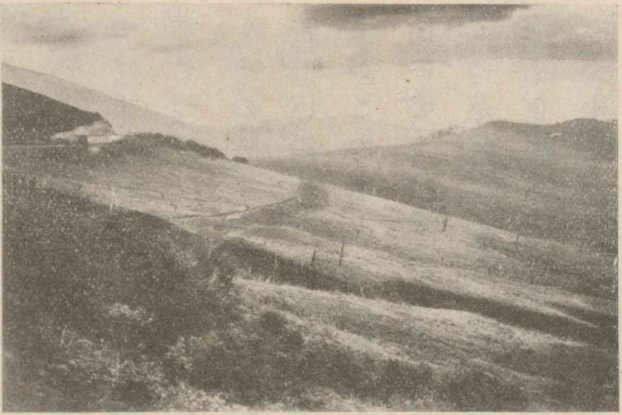
思出の多い旅路の記憶が胸の底に蘇つて來るたびに、私は三つの美しい落日の光景を想ひ起さずにはゐられない。落日の詩趣、落日の悲哀、落日の哲理、それはいづこいかなる所に於ても、眺める人の心持によつて深く淺く、とり／＼に感ぜられるものである。孤影を追うてさすらひ行く寂しい旅路で、私はその三つの黄昏から、どんなに深い、そしてどんなに忘れ難い印銘を得たであらう。

ちやうど二月半ばのことであつた。

私は石狩川の源流から、かの有名な狩勝の嶮所を越えて、十勝の曠原の方へ下る釧路行の列車に乗つてゐた。長い分水嶺のト

ほの明るく歎  
いてゐた冬の  
夕陽

病みほうけた



ンネルを出ると、今までは針葉樹林の底にほの明るく歎いてゐ

狩 勝 峠

た冬の夕陽が、いつの間にか國境の連巒のあなたに春いて、そこいらに積つてゐる雪層は、まるで凍つた紅蓮のやうにぎら／＼輝きだした。緩やかな傾斜をひいて平原の方へ流れ落ちてゆく狩勝嶮の山腹は、たゞ見る一望の大雪原で、その面のところどころにひよ／＼立ち腐れた樹林は、今その落日の名残を斜に受けながら、病みほうけたやうな長い影を倒してゐる。見わたす限り海の影を倒しては、もうそろ／＼薄紫の靄

人煙の薄い

神祕の郷國

に包まれて、人煙の薄いあつちこつちの開墾地には、村落の夜を飾るともし灯一つまたゝいてゐない。絶對の靜寂と、陰暗とした黄昏の中には、落ちてゆく夕陽の悲しみだけが刻一刻に濃くなつて來る。私は廣い／＼神祕の郷國を俯瞰してゐるやうな心持で、じつと十勝の平原を見おろしてゐた。

その時、私の胸には寂寥などといふ感じは悉く消え去つて、重苦しい鉛のやうな恐怖だけが残つた。文明も、繁榮も、歴史もすべてがこの地上から消え失せて、かつて見た北方の絶海に浮ぶ氷山の姿だけが、幻のやうになつて眼底に膠着して來た。原始のままの落暉を浴びながら、假象そのもののやうに影さへ蒼く、暗い海上を「虚無」の方へ向つて徐々と浮流してゆくその神祕な氷山の姿、永遠を暗示したその幻影。私は十勝國に沈む落日の中に自然の威容を發見するよりも、まづその自然の底に隠された恐怖

眼底に膠着した

を見たのであつた。

私は凍えたやうな冷たい車窓の板硝子に頬を押當てたまゝ、最後の薄明りが空から消え落ちるまで我を忘れて凝視してゐた。北斗星の爛々と輝く暗い夜は、却つて私をその恐怖から救つてくれたのであつた。

後志しりべしの或濱にしんばの鯨場にしんばで見た落日。

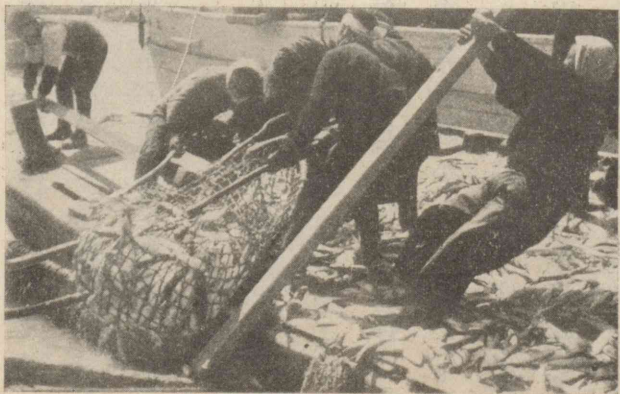
その日はこそりとも風の動かぬ底寒い日であつた。黄昏は、酸性液に浸した試験紙のやうに、透明な空氣の底からいつともなくぼうつと色づいて來た。薄紅い靄のやうな光は次第々々に焼けたゞれて、海上は須臾の間に眞紅な影のない焰に蔽はれてしまつた。岩礁にむせぶ波浪の飛沫も、鯨粹も、海上に漂ふ漁船も、すべてが一様に炎々と燃えあがつて、その反照は無限の虚空に向

後志  
北海道の西南  
部にあり、日  
本海に面する  
國。

コーラス  
合唱。

壽都岬  
後志國壽都町  
近くの岬。

つて微妙な夕暮のコーラスを唱へはじめる。と見ると、太陽は赤褐色の大盆のやうに光薄れて、いつの間にか壽都岬の沖あひ遠く沈んでゆく。その姿が水平線の上に少しづつ蝕まれて行つたかと思ふと、眞紅な靄を浮べた浩蕩たる波路のはてには、一條の金蛇がだん／＼と金鱗の敷を消して、その落日を頌榮する浮雲もない寂しさの中に、息をひくやうにすうつと姿を晦ましてしまふ。ほんとに何が荒寥としてゐるといつて、この北日本海に沈む落日ほど荒寥とした光景はまたとあるまい。



漁 鯨

姿を晦ます

暗い夜がにじみ出て来る

日が落ちると、海上にはまた、くうちに残暉が消えて、蒼ざめた紫色の空からは、待ちかねてゐたやうに暗い夜がにじみ出て来るのである。

やがて鯨のつく時刻が来る。

遠い沖あひから三羽四羽づつ鷗が寂しさうに啼きつれながら飛んで来たかと思ふと、なほ薄明りの残つた西空から、螟蟲のやうにうち群れたその鳥の集團が刻々に殺到して来て、低く水上を掠めて飛ぶ姿が、雪片のやうにちら／＼闇を破りだす。

「それ、鯨がついた。誰からともなく口々に傳へられるその言葉が、出船の櫓拍子と一緒に岩礁の多い荒磯を騒がす頃には、もうそこいらはとつぷりと暮れて、篝火のあか／＼と燃え立つ大漁の夜となつてしまふのであつた。

大漁の夜となつてしまふ

八が嶽  
山梨縣と長野縣との境にある休火山。

輕装を整へ

甲斐

山梨縣

信濃

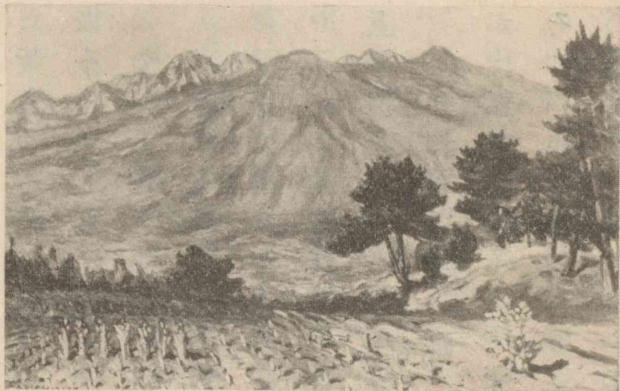
長野縣

上諏訪

長野縣上諏訪町。諏訪湖畔にある。

茅野

同縣諏訪郡宮川村の字。中央線の車驛がある。



八が嶽 (有島生馬筆)

私はもう十年ほど前に八が嶽の絶巔で見た落日を忘れることが出来ない。

その頃から私には異常な旅行癖があつたので、暑中休暇になると、私は必ず学校の制服に雑囊一つといふ輕装を整へ、殊に山地の旅を好んでゐたので、たつた一人で甲斐・信濃の深山幽谷にわけ入つたものであつた。

八が嶽に登つたのもさうした動機からであつた。上諏訪の町で逢つた或大學生と一緒に私は茅野を出る時には、妙に時雨れつて登山路にかゝつた。その日は茅野を出る時には、妙に時雨れ

蒼々とした空がすぐ頭の上に展けて來て

赤嶽

八が嶽の最高峰。

本澤温泉

八が嶽西北部の外輪山硫黄嶽と天狗嶽との間の溪谷にある。

さうな蒸暑い空あひだつたが、だん／＼と登るにつれて、蒼々とした空がすぐ頭の上に展けて來て、四周の展望はきかなくとも、灌木林に照りつける日光は、緑色のいきれをむんむとあふりたてて、何ともいへない壯快な登山日和になつて來た。その日の夕方、赤嶽の裾を廻つて本澤温泉の方へ降りようとする時、私たちは突然恐しい雷雲の中に捲きこまれてしまつた。初は靄かと思はれるやうな濛氣が山嶺の方から少しづつ降りて來たが、見る／＼うちに濃くなつて、まるで生きもののやうに息をしながら、厚い雲が層をなしてあたりを引包んで來る。冷たい濕氣はじと／＼と首筋へからみつくやうで、私たちは俄に呼吸の塞迫を覺えて來た。

そこへ突如、私たちの踏んで立つてゐる山肌が、ぶる／＼微動を傳へて來て、どこかで巨獸が咆哮してゐるやうな重苦しいど

天に沖した

よみが聞えだした。と、すぐ眼の前で今度はすさまじい大爆音が起つて、紫銀色の火柱がさつと天に沖した。その時の私の恐怖は、どんなであつたらう。友なる大學生は、

「そらつ噴火だつ。」と叫んだきり、私も何も置き去りにして、方角もわからぬ濃い雲の中をどこへともなく姿を消してしまつた。

私は途方に暮れて、すぐ鼻先へ迫つて來さうな火柱を眺めながら、手足を縛りつけられでもしたやうに突つ立つてゐたが、やがてはつと正氣に返つて、そのまゝ無我夢中で友の後を追つた。

何町ほど駆け降りたか、自分ではまるで知らない。何かにはつたり蹴躓いたかと思ふと、私の體はついと宙に浮んで、それつきり全く人事不省に陥つてしまつた。

暫くして友の聲に呼び覺されて、ふと眼をあけてみると、私はどうしたのか、高さ二丈ばかりもあらうかと思はれる斷層の上

人事不省に陥る

槍が嶽  
長野縣と岐阜縣との境にあり、八が嶽からは西北方に當る。  
蓼科  
長野縣にあり、八が嶽からは北方に當る。  
駒が嶽  
山梨縣にあり、八が嶽からは南方に當る。

から大きな地隙の中へ落ちてゐたのであつた。幸ひ大した怪我はなかつたが、右の足の踝くるぶしのところを打つたと見えて、足袋が破れて、そこから血が紅く流れ出てゐた。

その時になつて始めて氣がついてみると、噴火と思つたのは間違で、私たちは恐しい雷に追はれたのであつた。あたりには既に雲の群は消えて、赤嶽の頂上の、ちやうど雲と峰と相接してゐるところでは、すさまじい紫電が閃々と迸發してゐた。

私は暫くの間は腰が痛んで歩けさうもないので、それなり横になつて、友に介抱してもらつた。その時は天も地もはや夕暮になつてゐて、下界に重疊した密雲の間からは、光環を背負つたやうな夕陽が斜に光芒を落しながら顔を出してゐた。槍が嶽たが科、駒が嶽の絶峰は、いづれも雲の海に浮ぶ鳥影のやうに奇怪な形をした頭角を黒々と現してゐる。夕陽は時をり雲の縁邊に分

描破する

光され、紅・綠・黃・紫などの五彩に輝いて、人界から遠く隔絶した天上の美感をそこに集めてゐる。その刹那の美感こそ、實に天樂聞え、虚空に散華する天女の羽裳を見るときともいはいはうか。莊嚴・神祕・端麗あらゆる言葉をもつてしても到底その實相を描破することは出来ない。

さかしげな眼  
を見開く星  
冥想の底に葬  
られてしまふ

夕陽が山彙のがなたに没してしまふと、空の一方に射出される残暉が、更に美しい色彩の詩趣を現し、層をなした雲の群は茜色に濃く淡く染めなされて、次第々々に死灰色に褪せてゆく寂しさ。藍黄色の空は暗い紺碧に變つて、この世のものとも思はれないやうな眞紫に暮れかゝつてゆく。やがてそこにさかしげな眼を見開く星の數々と一緒に、群山の頂も深い溪谷も、いつとはなしに夜の沈黙と冥想の底に葬られてしまふのである。

私はその時、魂の底から宇宙といふものに對する驚異の念に

打たれたのであつた。

一八 蜜 柑

芥川龍之介

芥川龍之介  
作家、東京市  
の人、昭和二  
年歿、年三十  
六。  
横須賀  
神奈川縣横須  
賀市。軍港。  
二等客車  
當時は汽車で  
あつたが、今  
は電車になつ  
てゐる。

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰をおろして、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍しく私の外に一人も乗客はゐなかつた。外のぞくと、薄暗いプラットホームにも、今日は珍しく見送の人影さへ跡を絶つて、たゞ檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しうに吠えたりしてゐた。これ等はその時の私の心持と不思議なくらゐる似つかはしい景色だつた。私の頭の中には、いひやうのない疲労と倦怠とが、まるで雪雲の空のやうなどんよりした影を落してゐた。私は外套のポケットへじつと両手をつつこんだまゝ、そこにはひつてゐる夕刊を出してみようといふ元氣さへ起ら

なかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私は微かな心のくつろぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずる／＼と後ずさりを始めるのを待つともなく待ち構へてゐた。ところが、それよりも先に、けた／＼ましい日和下駄の音が、改札口の方から聞えだしたと思ふと、間もなく車掌の何かいひ罵る聲と共に、私の乗つてゐる二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、あわた／＼しく中へはひつて來た。と同時に一つづしりと揺れて、徐ろに汽車は動きだした。一本づつ眼をくぎつて行くプラットホームの柱、置き忘れたやうな運水車、それから車内の誰かに祝儀の禮をいつてゐる赤帽——さういふすべては窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行つた。私は漸くほつとした心持になつて、巻煙草に火をつけながら、始めて懶い臉を

あげて、前の席に腰をおろしてゐた小娘の顔を一瞥した。

それは油氣あぶらけのない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある鞞ひびだらけの兩頬を氣持の悪いほど赤くほてらせた、いかにも田舎者らしい娘だつた。しかも垢じみた萌葱色の毛絲の襟巻がだらりと垂れさがつた膝の上には、大きな風呂敷包があつた。そのまた包を抱いた霜燒の手の中には、三等切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから彼女の服装が不潔なものや、はり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから、巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたといふ心持もあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へ廣げてみた。するとその時、夕刊の紙面に落ちてゐた外光が、突然電燈の光に變つて、刷すの悪い何欄かの



活字が、意外なくらゐ鮮かに私の眼の前へ浮んで來た。いふまでもなく汽車は今、横須賀線に多いトンネルの最初のそれへはひつたのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見わたしても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間はあまりに平凡な出來事ばかりで持ちきつてゐた。講和問題、新郎新婦、瀆職事件、死亡廣告——私はトンネルへはひつた一瞬間、汽車の走つてゐる方向が逆になつたやうな錯覺を感じながら、それ等の索寞とした記事から記事へ殆ど機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、あたかも卑俗な現實を人間にしたやうな面持で、私の前に坐つてゐることを絶えず意識せずにはゐられなかつた。このトンネルの中の汽車と、この田舎者の小娘と、さうしてまたこの平凡な記事に埋まつてゐる夕刊と、——これが象徴でなくて何であら

卑俗な現實を  
人間にしたや  
うな面持

は。ふり出す

う。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であらう。私は一切がくだらなくなつて、讀みかけた夕刊をはふり出すと、また窓枠に頭をもたせながら、死んだやうに眼をつぶつて、うつらうつらしはじめた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅おびかされたやうな心持がして、思はずあたりを見廻すと、いつの間にか例の小娘が、向側から席を私の隣へ移して、しきりに窓をあけようとしてゐる。が、重い硝子戸はなか／＼思ふやうにあがらないらしい。あの軋だらけの頬はいよ／＼赤くなつて、時々鼻汁はなをすゝりこむ音が、小さな息の切れる聲と一緒に、せはしなく耳へはひつて來る。これは勿論私にも、幾分ながら同情をひくに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今まさにトンネルの口へさしかゝらうとしてゐることは、暮色の中に枯草ばかり明るい兩側の山

腹の底に險しい感情を蓄へながら

腹が間近く窓側に迫つて來たのでも、すぐに合點の行くことであつた。にもかゝはらずこの小娘は、わざ／＼しめてある窓の戸をおろさうとする。その理由が私にはのみこめなかつた。いや、それが私には、單にこの小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜燒の手が硝子戸をもたげようとして惡戰苦闘する様子、を、まるでそれが永久に成功しないことでも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなくすさまじい音をはためかせて、汽車がトンネルへなだれこむと同時に、小娘のあけようとした硝子戸は、とう／＼ぱたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶かしたやうなすす黒い空氣が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲りだした。元來咽喉を害してゐた私は、ハンカチを顔に當てる暇さへなく、この煙を滿身に浴びせら

れたお蔭で、殆ど息もつけないほど咳きこまなければならなかつた。が、小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛をそよがせながら、じつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る／＼明るくなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷やかに流れこんで來なかつた。な、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、またもとの通り窓の戸をしめさせたに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう易々とトンネルをすべりぬけて、枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はづれの踏切に通るかゝつてゐた。踏切の近くには、いづれもみすぼらしい藁屋根や瓦屋根がごみ／＼と狭苦しく建てこんで、踏切番が振る

懶げに暮色を  
揺つてゐた

曇天に押しす  
くめられたか  
と思ふほど

のであらう、たゞ一旒の薄白い旗が懶げに暮色を揺つてゐた。やつとトンネルを出たと思ふ——その時、その蕭索とした踏切の柵の向ふに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押に並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思ふほど、揃つて背が低かつた。さうしてまたこの町はづれの陰惨たる風物と同じやうな色の着物を着てゐた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に手を舉げるが早いか、いたいな喉を高く反らせて、何とも意味のわからない喊聲を一所懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出してゐた例の小娘が、あの霜焼の手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばら〜と空から降つて來た。私は思はず息を呑んだ。さうして刹那に一切を了

勞に報いる  
暮色を帯びた

解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懐に藏してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざ〜踏切まで見送りに來た弟たちの勞に報いたのである。

暮色を帯びた町はづれの踏切と、小鳥のやうに聲を舉げた三人の子供たちと、さうしてその上に亂落する鮮かな蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ないほどはつきりと、この光景が焼きつけられた。さうしてそこから、或爲體の知れない朗かな心持が湧きあがつて來るのを意識した。私は昂然と頭を舉げて、まるで別人を見るやうにあの小娘を注視した。小娘はいつかもう私の前の席に返つて、相變らず鞆だらけの頬を萌葱色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包を抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐる……。

私はこの時始めて、いひやうのない疲労と倦怠とを、さうして  
また不可解な、下等な、退屈な人生をわづかに忘れることが出来  
たのである。  
(芥川龍之介全集)

一九 山の風

落合直文 文藝博士  
仙臺市の人、  
明治三十六年  
歿、年四十三。

落合直文

與謝野寛  
京都市の人、  
昭和十年歿、  
年六十三。

與謝野 寛

窪田空穂  
名は通治、早  
稲田大學教授、  
長野縣の人、  
明治十年生。

窪田空穂

北原白秋

北原白秋

吉井勇  
東京市の人、  
明治十九年生。

吉井 勇

尾上柴舟

尾上柴舟

若山牧水  
名は繁、宮崎  
縣の人、昭和  
三年歿、年四  
十五。

若山牧水

山縣の教授、岡  
治九年生。  
山縣の教授、岡  
治九年生。  
山縣の教授、岡  
治九年生。

山縣の教授、岡  
治九年生。  
山縣の教授、岡  
治九年生。  
山縣の教授、岡  
治九年生。

だにせよ

ぼつくと雀出て来る残り風二百二十日の夕空晴れて

ひとつ星光るあたりや佐渡ならんかくおもひとつ、海  
越す我は

山のさき一つめぐればあなさやけ月の光にわが逢へ  
りけり

ひとしきり散りての後を、しづもりてうらゝけきかも  
遠き櫻は

前田夕暮  
名は洋三、  
奈川縣の人、  
明治十六年生。

ふるさとは冷たき土のにほひしてこほろぎのなく薄  
月夜かも

前田夕暮

金子薫園  
名は雄太郎、  
東京市の人、  
明治九年生。

卯の花の垣根ぬらして雨すぎし灯ともし頃を訪ふ人  
のこゑ

金子薫園

吉植庄亮  
千葉縣の人、  
明治十七年生。  
寂光院

この朝やポプラの黄葉いまだ落ちずかすかなる揺れ  
をたもちつゝあり

土岐善麿

京都府愛宕郡  
大原村にあり、  
平家滅亡後、  
高倉天皇の中  
宮建禮門院の  
籠られた所。  
佐佐木信綱  
文學博士、三  
重縣の人、明  
治五年生。

堂の扉のきしむ音ありて夕ちかし山の向ふに陽のゐ  
る寒さ(寂光院)

佐佐木信綱

やまとの青垣山の朝がすみはろかに見つゝ春の草ふ  
む

木下利玄

木下利玄  
岡山縣の人、  
大正十四年歿、  
年四十。

大和路は田圃をひろみ夕あかるしいつまでも白き梨  
の花かも

御堂いつれば  
只今の間に日  
はかくれ雨の  
粉ちれり大原  
の峽に 利玄

石樽千亦

したゝかに飛沫をかぶり千島の海大きうねりにゆす  
ぶられゆく

川田順

雲雀が鳴くこの野つばらの日の光あはれどこかに雲

川田順  
東京市の人、  
明治十五年生。

石樽千亦  
名は辻五郎、  
愛媛縣の人、  
明治二年生。

雀が鳴くも

正岡子規

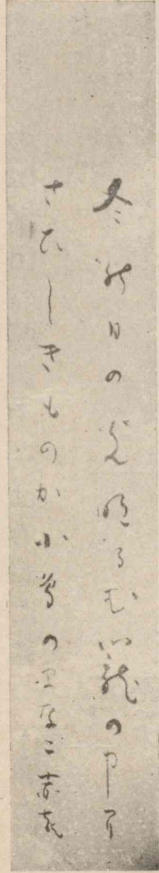
16 別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ繪にかける  
かも

伊藤左千夫

17 おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとくと柿の落  
葉深く

長塚節

18 白堊の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみに  
けり



伊藤左千夫  
名は幸次郎、  
千葉縣の人、  
大正二年歿、  
年五十。

冬の日の光明  
るむ籠の中に  
さひしきもの  
か小鳥のまな  
こ 赤彦

島木赤彦

本姓名は久保  
田俊彦、長野  
縣の人、大正  
十五年歿、年  
五十一。

島木赤彦

中村憲吉

廣島縣の人、  
昭和九年歿、  
年四十六。

中村憲吉

19 わが馬の歩みおのづからとまりて野中の萩の花食  
ひにけり  
梅林の外にて鶴は羽ばたけり芝生につくる影の大  
きさ

岡麓

岡麓  
名は三郎、東  
京市の人、明  
治十年生。

20 この朝け桐の花咲く屋敷町いとけなき兒を歩かせに  
けり

齋藤茂吉

齋藤茂吉

醫學博士、山  
形縣の人、明  
治十五年生。

土屋文明

群馬縣の人、  
明治二十四年  
生。

22 ひさかたのしぐれふりくる空さびし土に下りたちて  
鴉は啼くも

土屋文明

古泉千樫  
名は幾太郎、  
千葉縣の人、  
昭和二年歿、  
年四十二。

23 ひるすぎてなほ下つゆの乾かざる落葉の中のリん  
うの花

古泉千樫

24 夕ふかしうまやの蚊遣燃え立ちて親子の馬の顔あか  
く見ゆ

太田水穂

太田水穂  
名は貞一、長  
野縣の人、明  
治九年生。

25 蘆火たく攝津平野の花ぐもり生駒が嶽をすゑて大い  
なり

尾山篤二郎

26 松島の松ふき渡る風の音秋風なりと聞きてをりつも

尾山篤二郎  
金澤市の人、  
明治二十二年  
生。

二〇 集團的儀禮

下田次郎

下田次郎  
教育學者、文  
學博士、東京  
女子高等師範  
學校教授、廣  
島縣の人、明  
治五年生。

凡そ精神は、外界の刺激に影響されて、善くもなり、また悪くもなる。随つて外界を整へるといふことは、精神修養の上にも大切なことである。

例へば着物にしても、自分が不斷着を纏うてゐる時と禮装をした時とでは、氣持が非常に違ふものである。不斷着では、おのづから氣持が緩み、禮装では無意識に氣持が引緊る。また正坐してゐる時と安坐してゐる時とでも、そこにおのづから氣持の相違が生ずる。或は他人に對する時などでも、先方が羽織袴で扇子でも持つて應對されると、こちらもおのづから氣持が正しくなつて來る。が、相手が着流して安坐のまま、應對されると、自然にこちらもさうした態度に誘はれるものである。挨拶の仕方や物のい

無意識に

さうした態度に誘はれる

喧騒の中に引  
入れられる

ひ方も、またその場合々々によつて自然に變つて来る。整然とした式場などでは、おのづから居ずまひを正すが、群衆の集まつてゐる騒がしい所では、自然にその喧騒の中に引入れられてしまふ。結局、外を整へるといふことは、内を整へるためにも、忽せに出來ないものである。

それ故に禮儀を正しくするといふことは、人と交際をする上にも、また社會の秩序を維持する上にも必要缺くべからざるものである。なほこれを反對の方面より觀れば、外は内の現れともいふべく、外貌によつてその人の心の内を想像することも出来るし、その人の精神修養の程度や、人格の如何もほゞ察知することが出來る。故に外形を整へるといふことは、當然みづからを正しくしようとする紳士淑女の第一に心がけなければならぬ條件である。

眞實をもつて  
これに對する

圓く行かない

和氣霽々

件である。

さて、この禮儀は、敬と恕との心から生れて來るものである。敬とは敬虔の念であつて、他人はすべて尊ぶべき人格者であるとし、眞實をもつてこれに對し、謙讓をもつてこれに接し、自分もまたさうした人格者であり、過のない行爲をしなければならぬものであると、つゝ、ましく自重する心である。恕といふのは、思ひやりであり、同情であり、寛宏の心である。多數の人々が集まつて一の集團的生活をなすには、この恕といふ心がなければ決して圓く行かないものである。

例へば集會にしても、それは自分一人でやつてゐるのでなく、皆が同じ目的によつて集まつてゐるものであり、共に樂しまなければならぬものであるといふ氣持になつて、謙讓と寛宏との心持でゐれば、その集會は和氣霽々のうちに進行する。そして



かうした氣持でお互に交際を續けてゆくところに、始めて完全な社會生活が營まれるのである。

日本は過去約半世紀の間に、種々な文物・風教を西洋から採り入れた。しかしそれをどんな風に扱ひ、どんな風に用ひるべきであるかといふことを一向知らないのである。たゞ淺薄な初歩の形式だけを眞似て、その細かい點に至ると支離滅裂の有様である。その使用法を無視し、禮儀を無視して、しかも得々としてゐるところがある。

さうした例を帽子に取つてみると、日本人は帽子をかぶることだけは外國に模して知つてゐるが、脱帽の點などになると一向に知らないで、禮儀を無視したことを平氣でしてゐるのを非常に多く見受ける。例へば我が國歌である「君が代」が吹奏される場合でも、脱帽もせず、起立もしない人が少くない。西洋では、妄り

支離滅裂

得々としてゐる

に國歌を吹奏もしないが、もし吹奏した時には、そこにゐるすべての人が脱帽起立する。また西洋では、友人とつれだつてゐて、その友人の知人に會つた時は、たとひ自分はその人を知らなくとも脱帽する習慣になつてゐる。かうして脱帽すると、非常に親しい感じを相手に與へるものである。然るに日本人の間では、かうした場合に、たゞ知つた同士が脱帽するだけで、つれの人は脱帽もせず、知らぬ顔をしてゐるのが普通で、實に冷やかな感じを相手に與へる。途中葬列に出會つた時でも、西洋では途行く人々が必ず棺に向つて脱帽するが、日本人は一向平氣で、その傍を通り過ぎてゐる。かうした時は、その死者が知人であらうとなからうと、脱帽する方が禮儀にもかなひ、人としても奥ゆかしい。即ちその死者が我々の同胞であり、共に同じ社會に生活してゐたものとして見れば、當然脱帽しなければならぬのである。かやうな

例は數へあげれば際限がないくらゐあるが、要するに日本人が帽子の扱ひ方を知らない證據である。

西洋思想の影響を受けて、一時自由平等の思想が喧しく唱へられたことがあつた。これは一面甚だ結構なことであるが、その結果は遺憾ながら悲しむべき多くの現象を生んでゐるのである。第一、長幼の序といふやうな觀念が一般に薄くなつて來た。往々にして幼い者が長上の者に對して禮を失した行爲をしてゐるのを見受ける。敬せずんば何をもつて分たんや。といふ語があるが、人間と禽獸との相違は、この敬といふ觀念の有無に存するのである。然るに現代の青年は、一般に衝動的であり、やりつ放しである。嫉しほがない。挨拶にしても至極蕪雜である。たとひ人の世話になつても、うまく行けば、自分の力のやうに思つて禮狀さへ出さない人が多い。そしてそれがよい結果を得なければ、却つ

て怨にさへ思ふのである。禮儀を盡してこれに報いるといふやうなことを平凡と心得、これを省みようともしない。忌はしい世相といはなければならぬ。

自己を修めるには、その第一歩より始めるべきである。まづ隣人を愛せよ。といふ語の如く、高遠な理想や、尊い人格の光は、遠い所にあるのではなく、日常の我々の身邊にあるのである。よく人は他人の風體を批評する。しかし他人を批評するその言葉で、自身の風體を批評してゐる人がどれほどあるであらうか。自己を外にして他を批評するが如きは、正しい人のなすべきことではない。他人の缺點を笑ふ人に限つて、己れはより以上の缺點をもつてゐるものである。人はまづ己れを正しくしなければならぬ。己れを正しくすれば、また他人をも正しく解し得るもので、かくして始めて尊い人格者となり得るのである。人格の光は、他人

を批議するところより生ずるのではなくして、それは敬虔と寛宏とを忘れない儀禮的行爲から生ずるのである。

二 扇の的

さるほどに、阿波讚岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの嶺、この洞より、十四五騎、二十騎うちつれ、馳せ來るほどに、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ、勝負を決すべからず。とて、源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕ぎ寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、舟を横ざまになす。あれはいかにと見るところに、舟の中より年のよはひ十八九ばかりなる女房の、柳の五つぎぬに紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを、舟のせがいに挟み立て、陸へ向つてぞ招きける。

阿波 徳島縣。  
讚岐 香川縣。  
判官 源義經。  
今日 壽永四年二月十八日。  
尋常に飾つたる小舟

手だれ

射させらるべ  
うもや候らん

下野 栃木縣。

さん候



判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに。と宣へば、射よとに

こそ候らめ。但し大將軍の矢面に進んで、けいせいを御覽ぜられんところを、手だれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。ざりながら、扇をば射させらるべうもや候らん。と申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かある。と問ひ給へば、手だれども多う候中に、下野國の住人那須太郎資隆が子に、餘一宗隆こそ、小兵には候へども、手はきいて候。と申す。判官、證據があるか。さん候。翔鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候。と申しければ、判官、さらば餘一呼

いろへたる

べ。とて召されけり。

餘一その頃は、いまだ二十ばかりの男なり。褐かへに赤地の錦をもつて、大領おほねう端袖はたそでいろへたる直垂なほに萌葱もも絨じやうの鎧よろい着て、足白あししろの太刀を佩ひき、二十四さいたる切斑きりばの矢負やぶひ、薄切斑うすきりばに鷹たかの羽はわり合あはせてはいだりける。ぬための鎬ほをぞさし添そへたる。重籐おもたけの弓脇ゆきに挟くわみ、兜かぶとをば脱ぬいて高紐たかひもにかけ、判官はんごんの御前ごぜんに畏おそまる。判官はんごん、いかに餘一、あの扇あふの真中まぢゆう射やて、敵たてに見物けんぶつせさせよかし。と宣のたまへば、餘一、仕つかるとも存ぞじ候ははず。これを射損やぶずるものならば、永ながき身方みかたの御弓ごきゆう矢やの瑕けがにて候はべし。一定いぢやう仕つからうずる仁にに仰おほせつけらるべうもや候はらん。と申しければ、判官はんごん大きおほきに怒いかつて、今度いまど鎌倉かまくらを立つて西國さいごくへ向むかはんずる者ものどもは、皆みな義經よしねが下知げちを背そむくべからず。それに少しも仔細しじゆを存ぞんぜん人々ひとびとは、これより疾はやうく鎌倉かまくらへ歸かへらるべし。とぞ宣のたまひける。餘一、重ねて辭ことせば悪わるしかりなんとや思おもひけん。さ候はば

仕るとも存じ候はず

一定仕らうずる仁

さ候はば

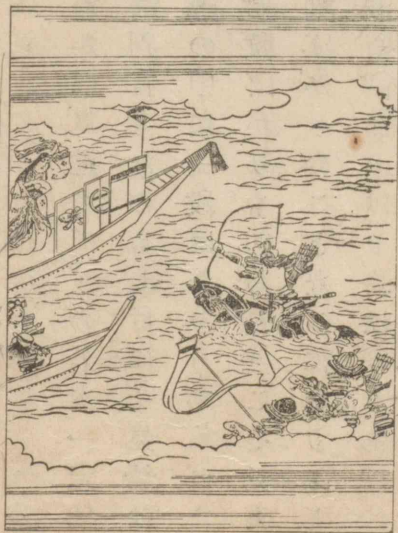
太う。

はば、外とれんをば存ぞんじ候ははず、御誕ごたんで候はへば、仕つかつてこそみ候ははめ。とて御前ごぜんを罷くだり立たち、黒くろき馬うまの太おほう遅おそしきに、まろほや摺すりつたる金覆輪きんぷろんの鞍くら置おいて乗のつたりけるが、弓取きゆうとりなほし、手綱てなわがいくつて、汀つらへ向むかいてぞ歩ありませける。

身方みかたの兵へいども、餘一が後あとを遙とほかに見送みおくつて、この若者わかしよ、一定仕つからうずると覺おぼえ候は。と申しければ、判官はんごんもたのもしげにぞ見給みたまひける。矢やごろ少し遠とほかりければ、海うみの中に一段いちだんばかりうち入れたり。くれども、なほ扇あふのあはひは、七段しちだんばかりもあらんとこそ見えた。りけれ。頃は二月にがつ十八日じゅうはちにち酉うしの刻ときばかりのことなるに、をりふし北風きたかぜ烈はげしう吹ふきければ、磯いそうつ波なみも高たかかりけり。舟ふねはゆりあげ、ゆりすゑ漂たふへば、扇あふもくしに定さだまらずひらめいたり。沖おほには平家へいけ船ふねを一面いっぺんに並ならべて見物けんぶつす。陸りくには源氏げんじ、くつばみを並ならべてこれを見る。いづれもくく晴はならずといふことなし。餘一、目をふさいで、南無

我が國  
下野國。  
日光の權現  
今、栃木縣日  
光町に鎮座す  
る國幣中社二  
荒山神社。  
宇都の宮  
今、同縣宇都  
宮市に鎮座す  
る國幣中社二  
荒山神社。  
那須のゆぜん  
大明神  
今、同縣那須  
郡那須村に鎮  
座する溫泉神  
社。

八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん、大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り、自害して、人に再びおもてを向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、この矢外させ給ふな。と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなつたりけれ。餘一、鏑を取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふでう、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴りして、あやまたず扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞあが



扇の的

りける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の日出いたるが、夕日に輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家、舷をたゝいて感じたり。陸には源氏、箆をたゝいてどよめきけり。

(平家物語)

### 二三 或日の蓮月尼

岡本かの子

岡本かの子  
歌人、東京市  
の人、明治二  
十六年生。

蓮月  
俗姓名は大田  
垣誠、歌人、  
尼僧、明治八  
年寂、年八十  
五。

(六疊ほどの部屋、机一つと米櫃一つ置いてある。傍は土間になつてゐる。土間には轆轤臺と陶土、出來あがつた急須や茶碗も五つ六つ並んでゐる。立派な士が、供の士二人と部屋の縁に腰かけてゐる。これに對して蓮月は別に愛想よくもなく、また無愛想といふほどでもなく、極めて自然の態度で、士が望むまゝに、出來あがつた陶器を棚からおろして見せてゐる。)

蓮月 もうこの外に出來たものはございません。

松風の歌

「山ざとは松の聲のみ聞きなれて風吹かぬ日はさびしかりけり」蓮月

よあらしのつらさはては雪となりておきてほたくふゆのやまさと 蓮月

主人の士 いや、もうこれで結構ぢや。どの品にも一風流あつて、おもしろいが、わけてこの蛙の繪を描いた松風の歌の茶道具一揃が、俗を離れて飄逸ぢや。これをもらつて行くことにせう。  
蓮月 不細工なもので恐れ入ります。  
供の士の一 蓮月さんの假名書きは今日世間に定評あつて有名

よあらしのつらさはては雪となりておきてほたくふゆのやまさと



蓮月尼筆蹟

ですが、繪までいつの間にか見事にお描きになるとは、随分御器用なことですね。

蓮月 ほゝ、繪などと仰せられては痛み入ります。ほんの模様代りのいたづら描きなのです。

供の士の二 いや、いたづらどころではない。人間、魂さへ磨かれておれば、何をせうと皆ぬけ出るといふのは本當です。この蛙の繪なども、氣品の高さ、京やそこの商賣畫かきなどは、足もとにも及ぶものではない。

蓮月 いゝえ、全く女の手すさびの素人描きなのです。この蛙も始めて描きますので、一體蛙の手の指が五本のものやら三本のものやら一向存じませんので、裏の田へ行き、蛙をおさへて指を見せてもらつたほどでございます。

主人の士 はゝゝゝゝ。

供の士の二 はゝゝ。そこが無垢で尊いところですよ。

(蓮月、客の讚辭を聞き流し、そろ／＼品物をしまひかける。)

主人の士 おゝ、大分邪魔を致した。それでは、これをもらつて戻ると致さう。

蓮月 さやうでございませうか。失禮致しました。それでは包紙を  
さしあげませう。

（供の士、蓮月より包紙を受取り、陶器を包み、提げられるやうにくゝる。  
立ちあがつた主人の士、供の士にちよつと目くばせするので、供の士  
の一、懷中より金を取出し、紙に包んで）

供の士の一 輕少ですが、これは料金です。

蓮月 ありがたうございます。

（客の士つれだち去る。蓮月、土間の轆轤臺の前に坐つて、陶器の仕事に  
とりかゝる。一方、客の三人が枝折戸を出て十二三間行く時、儒者にし  
て畫家の鐵齋、年頃二十七、八、友人龜田をつれて來かゝる。雙方すれ違  
ふ。鐵齋は主人の士を振返つて、いぶかしき面持、しかしすぐに態度を  
取戻し、枝折戸の前に立ちどまる。）

鐵齋 （龜田に）いいか、さつきもいつたやうに、尼さんは月並な訪

鐵齋  
本姓名は富岡  
百鍊、大正十  
三年歿、年八  
十九。  
龜田  
假に作つた人  
物。

問やむだ話が、大嫌なのだから、決して口を利いてはならんぞ。  
萬事おれがうまく取計らふから。

龜田 それは大丈夫だ。おれはたゞ有名な蓮月尼を見さへすれ  
ば、いいつもりだ。

鐵齋 その有名扱がまた尼さんの嫌の隨一と來てゐる。尼さん  
は世間から名士扱にされるのをうるさがつて、屋越しの蓮月  
といはれるほど屋越しを致したくらゐだから、その名士見物  
のそぶりをちらつとも見せてはならんぞ。

龜田 なか／＼、厳しいな。まあ萬事あなたの指揮にまかせる。  
（鐵齋、おづ／＼枝折戸をあけ、龜田を伴ひ内に入る。蓮月はやはり土  
間の轆轤臺の前に坐つてゐて、工作に餘念もない。）

鐵齋 今日はお仕事ですか。

蓮月 ……………。

鐵齋 お仕事に御念が入りますな。

(蓮月、振向かず、そのまゝ口を利く。)

蓮月 どなたですか。

鐵齋 私です。鐵齋です。

蓮月 鐵齋さんですか。勉強が忙しいでせうに、わざわざ何の御用ですか。

鐵齋 え——その一人友人が陶器がほしいといふのです。

蓮月 あなたのお友だち……。それでわたしの陶器がほしいの。(蓮月始めて首を振向け、鐵齋と龜田を見る。龜田あわててお辭儀をする。)

蓮月 ほゝゝゝ。鐵齋さん、あなたまた、わたしのいひつけを破りましたね。お友だちの方は陶器がほしいのぢやなくて、この坊主頭の女を見物に來たのでせう。

鐵齋 申譯がありません……。

蓮月 まあせつかくつれてい

らつしやつたのですから、縁側でなりと休んでお出でなさい。

(龜田はすつかり恐縮して、お辭儀ばかりしながら、鐵齋と縁の端にかたくなつて腰かける。二人は暫く手持無沙汰の様子、蓮月はまた工作に戻る。暫く轆轤臺の軋る音だけが、春晝のど

けさの中に耳につく。龜田と鐵齋がひそひそ話始める。だんぢい音が高くなる。)



(筆志弘石羽) 尼 月 蓮



龜田 一言ぐらゐよささうなものだ。

鐵齋 さつきあれほどいかんといつたちやないか。

龜田 でもせつかく――。

鐵齋 いかんく。

(蓮月振向いて)

蓮月 何をいひ争つてゐるんです。

鐵齋 いえね。この男が何かあなたにお尋ねしたいといふん

す。私はつれて来る最初に、つれてだけは来るが、決して談話で

あなたを妨げないやうにと、堅く約束したんです。だのに――。

蓮月 鐵齋の言葉を抑へるやうに、この世捨人の尼に、あなた方のやうな青年が聞くことがあるのですか。

(蓮月、轆轤臺の前を立ち、部屋の方に来る。そこで爐の釜の湯の様子を見て、茶を入れ、二人にすゝめ、縁に近く来て坐る。)

蓮月 鐵齋さんのお友だちの方、まあ、それぢやいつて御覽なさい。お答へ出来ますかどうか、何も私は知りませんが。

龜田 (實直な青年らしく、ひどく切口上になつて失禮ですが、ぢや、伺ひます。私は鐵齋君からあなたのごことは始終聞いてをります。が、あなたは理想を死後の世界に求める厭世家であつて、何故陶器を作つて賣つたり、歌の短冊を書いて賣つたり、この現實の世で一所懸命に働いてをられるのですか。)

蓮月 働かなければ食べられないではありませんか。

龜田 いや、あなたのは、食べる程度以上に、何か働くといふことに價值を認めてやつてゐられるやうに見えるのです。本當の厭世家なら、もうこの現實の世には望を斷つたのだから、働いてもしやうがないはずなのに、あなたはせつせと働いてお出でになる。どうもその間に矛盾があるやうに思はれるのです。

理想を死後の世界に求める

蓮月 あなたは働くといふことを、目的のためと思つてお出でになる。それでその不審があるのです。私のは違ひます。私のは働くといふそのことが、生存の自然なのです。何々のために働くとか、何になるが故に働かなくてはいけないとかいふ理窟はないのです。働かないよりは働いてゐる方が、より自然だからさうやつてゐるまでなのです。

龜田 それで世捨人なのでせうか。

體験の上から申すと  
打算から切り  
はなされる

蓮月 あなたは世を捨てたことはおありにならないし、またさうせよとお勧めするわけではありませんが、實際體験の上から申すと、世を捨てれば、この世の中で働きよくもなるし、また働きも出来るのです。何故といへば、働いてもその効果を考へないから、打算から切りはなされて自由だし、強ひられる義務がないから、却つて身輕に動けます。本當に働くために働く純

粹の心持を得られるのです。しかしかう説明すれば、それはもう世捨人の働きに效能書がきがついて、うるさくなります。事實は、世の中をあきらめると、何だか自分で自分がをかしいくらゐ働きだし、しかもそれを働いてゐるとも感じないのです。

龜田 さう働けば、あなたと親御さんお二人のお暮しては、金が餘りませう。その餘りの金の始末はどうなさるのです。

蓮月 (手で遮つて) もうやめませう、お互に働く時間をむだに費しますから。あなたも勉強盛りの年頃ではありませんか。

(蓮月また轆轤臺の前に戻る。)

鐵齋 龜田、もうよからう。いよ／＼約束が違ふぞ。

(龜田、お辭儀をしてす／＼立ちあがる。鐵齋も立ちあがりかけて、先刻士が置いて行つた縁さきの金包に氣がつき、手に取上げる。)

鐵齋 尼さん、又金をはふり出したまゝですよ。だらしがないな。

蓮月 それは、さつきの客が置いて行つた陶器代でせう。

鐵齋 陶器代にしては重いなあ。

蓮月 あけてみて下さい。

鐵齋 や、小判だ。さつき行つた客つていふのは、あの私等が道ですれ違つた三人づれでせう。あれなら殿様とお付きの士だ。殿様がお微行で陶器を買ひに来て、これを置いて行つたのですよ。

蓮月 何しろ陶器二組に小判は多過ぎます。あなた、殿様のお宿を知つてゐませんか。

鐵齋 知つてゐます。四條烏丸です。

蓮月 では、十日ほどしたら、また陶器がたまりますから、差引残りの價だけのものを持つて、あなたお宿まで届けて行つて下さい。

四條烏丸  
今、京都市中  
京區。

鐵齋 承知しました。

蓮月 それに今、そのお金はわたしの所に入用ありませんから、橋の方の費用にやつて下さい。

鐵齋 では、お預りして行きます。

(兩人一禮して枝折戸を出る。道にさしかゝる。)

龜田 橋の費用とは何だね。

鐵齋 尼さんは自分で費用を出して、賀茂川に人助けのための橋を架けつゝあるのだ。

龜田 ふむ。尊敬の念に堪へぬ表情で尼の方を振り返り、暫くじつと立ちどまつてゐる。  
(散華抄)

二三 人臣の道

北畠親房

凡そ王土に生れて、忠を致し、命を捨つるは人臣の道なり。必ず

北畠親房  
吉野朝の忠臣、  
正平九年歿、  
年六十三。

あらぬにや

危うする端

前車の轍云々

後車の轍は、

(漢書)

武を執りて仕

いひがひなき

これを身の高名と思ふべきにあらざ。然れども後の人を勵まし、その跡を憐みて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望を致すこと、みづから危うする端なれど、前車の轍を見ることは、まことにあり難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅ぼし、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべし。といふ制符度々ありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は、**宣旨**を賜はりて、諸國の兵を徴し、具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりにけり。

節に死ぬるたぐひ

言語は云々  
「易經」に見え  
る語。  
あからさまに

堅き氷は云々  
「霜を履んで  
堅氷至る。」  
(易經)

この頃の諺には、一たび軍に驅けあひ、或は家の子、郎從、節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては、日本國を賜へ。もしは、半國を賜はるとも足るべからず。などぞ申すめる。まことにさまて思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、また朝威の輕々しさも推しはからるゝものなり。言語は君子の樞機なり。といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることにはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣、賊子といふものは、そのはじめ心言葉を慎まざるより出で來るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにも

神皇正統記一甲  
大日本神國也天祖始基ノ爾キ日神長久孫傳ハ  
給我國ノ此事有典朝ノ直類元ノ故神國也也神  
代ノ豊原原ノ三ノ瑞穂ノ國ノ大地開闢ノ始ヨリ此  
名有リ天祖國常ニ尊陽神陰神授ケ給ヒ勅國ニ  
天孫天孫孫尊ニ授ケ給ヒ此名有リ六根本ノ事  
ト知ス又天八洲國ト是陽神陰神此國ヲ生給ヒカ  
ハ鳴リテ收メ各々ノ事又亦蘇土ニ是天八洲  
中國名也事ハ當々天孫成安豊秋津別ヨリ神  
生給ヒ是天日本豊秋津別ノ名今ノ四十八箇國分リ  
中洲ノ上ニ神武天皇東征ヨリ代々皇都也仍其各取

神皇正統記古寫本

許由 支那古代の箕  
山の隱士  
堯 支那古代の聖  
帝  
潁川 源を河南省に  
發し、東南流  
して淮水に入  
る。  
巢父 支那古代の隱  
士。  
恩に誇る

あらず、草木の色の改まるにもあらず。人の心の悪しくなりゆく  
を末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんと  
ありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水  
をだにきたながりて渡らざりき。その人の五臟六腑の變るには  
あらず。よく思ひならはせる故にこそあらめ。  
なほ行末の人の心、想ひやるこそあさましけれ。大方己れ一身  
は恩に誇るとも、萬人の怨を残すべきことをば、などか顧みざら  
ん。君は萬姓の主にてましますれば、限りある地をもちて、限りなき  
人に分たせ給はんことは、推しても測り奉るべし。もし一國づつ  
を望まば、六十六人にて塞がりなん。一郡づつといふとも、日本は  
五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は喜ぶとも、千萬の人は喜  
ばじ。況や日本の半ばを志し、みながら望まば、帝王はいづくをし  
らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出で、面に恥づる

將門 平氏、平安時  
代中期の叛臣  
天慶三年、平  
貞盛・藤原秀  
郷等のために  
誅せられた。

留 今の江蘇省沛  
縣の東南。  
文治 第八十二代後  
鳥羽天皇の御  
代。  
泰衡 藤原氏。  
平重忠 畠山重忠。

色のなきを、謀叛のはじめといふべきなり。昔の將門は、比叡山に  
登りて、大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひに  
やはべりけん。昔は人の心正しくて、おのづから將門に見も懲り  
聞きも懲りはべりけん。今は人の心かくのみなりにたれば、この  
世はいよゝゝ衰へぬるにや。  
漢の高祖の天下をとりしは、蕭何張良韓信が力なり。これを三  
傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の  
師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決  
するはこの人なり。と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留と  
いひて少しきなる所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多  
く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代の事ぞかし。賴朝  
の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、みづから向ふ  
ことありしに、平重忠が先陣にて、その功勝れたりければ、五十四

長岡の郡  
今の宮城縣栗  
原郡地方。

郡の中、いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたる少  
き所を望みて賜はりけるとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめ  
んがためにや。賢かりけるをのこにこそ。  
(神皇正統記)

二四 まごころ

芳賀 矢一

芳賀矢一  
國文學者、文  
學博士、福井  
市の人、昭和  
二年歿、年六  
十一。

我が國の神話は極めて平和である。八百萬の神はあつたが、我  
が皇祖神に向つて敵對行動をとつたものはない。天照大神の岩  
戸隠れは、御弟の素戔鳴尊の御行爲を怒られたため、その時に  
は八百萬の神が一同集會して、その善後策を講じた。外國の太陽  
神の如く、或は幽閉せられたり、或は一時殺害せられて、また復活  
するやうなことはない。八百萬の神はいづれもおとなしい忠義  
な神で、天つ神も、國つ神も、皇祖神の御子孫の御事業を輔翼する  
ことをのみ力めてゐる。その御事業を妨害したり、またはその國

土を奪ひ取らうなどといふ神は全くない。まことに平和な神話  
である。神話は即ち我が太古の國民の心性を反映したものであ  
る。

この太古の國民の精神には、明らかに君臣の分が定まつてゐ  
る。皇祖神の御血統が即ち皇位を繼ぐべき種で、その餘のものは  
皆この國土にゐて、その下に服従すべき種と定まつてゐる。皇室  
は全く別なものである。我等國民よりは一段高いものである。こ  
れは「かみ」である。長上である。神である。「かみ」といふ語は、神上髪に  
通ずる語で、すべて上にあるものを意味する。この「かみ」といふ思  
想は、太古以來今日に至るまで、我等日本人が皇室に對して常に  
もつてゐるところで、同族中から成りあがつて、氏姓をもつてゐ  
る帝王に對する外國臣民の感想とは大差のある點である。柿本  
人麻呂が、

柿本人麻呂  
藤原の宮時代  
の歌人。古來  
歌聖の名を負  
うてゐる。歿  
年不詳。

大君は云々  
「萬葉集」卷三  
に見える。  
今の奈良縣高  
市郡飛鳥村の  
宇雷にある丘  
神さびせすと

大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりするかも

と歌つたのも「かみ」即ち神といふ上代思想をいひあらはしたものである。その外、やすみしし我が大君、神ながら、神さびせすと「天の原、岩戸をひらき、神あがり、あがりいましぬ」などと、いづれも神として詠むのである。現神と大八洲國しろしめすと「宣言にはある」「あきつみかみ」または「あらひとがみ」とは、現在生きてお出でなさる神といふ意である。漢字で書けば、神と上とは違ふが、國語では區別がない。

皇室に對して敬虔の念を有することはこの通りであるが、ただ神として恐れ畏むばかりではない。皇室のことを「おほやけ（公）」といふ。大家の義である。皇室に對しては、我々は「小家」である。即ち皇室は我等の本家宗家であるといふ考がある。この思想の中に

は皇室と國民との間に多くの親愛の意味がこもつてゐる。統治者と被統治者といふ間柄ではなくして、心の底から上下互に親睦してゐる趣がある。八百萬の神は、皇祖神の御事業を翼賛する方ばかりであるが、義理の上から服従して恐れてゐるのではない。大本家の家長として尊敬してゐるのであり、その間には、親子的關係が成り立つてゐるのである。親の命令は、子として聽かねばならぬ。親の心は喜ばせねばならぬ。親からは何を與へられても嬉しい。親子の愛情は人の至情で、これが「まごころ」である。この「まごころ」が即ち忠である。忠といふ語は漢字の音であるが、日本語に譯せば「まめごころ」「つまり」「まごころ」の外はないのである。日本では忠も孝も同じこととて、どちらも同じく「まごころ」である。この「まごころ」をもつて皇室に對するのが、國民の情である。神のやうに尊んで、神のやうに畏れ、神のやうに頼みにして、親のや

天地正大の氣云々

藤田東湖の「正氣歌」の冒頭。

敷島の云々

「敷島の大和心を人間はば朝日にほふ山ざくら花」

(本居宣長)

兄弟牆に闘ぐ

馬前に討死する

うに有難く思ふ。それ故、天皇の命とあれば、どんな事でも服従する。いや／＼するのではない。有難がつてするのである。土地返上などは愚かなこと、身命をも喜んで差出すのである。天地正大の氣、粹然として神州に鍾る。といふその正大の氣も、敷島の大和心を人とはばといふその大和心も、皆この「まごころ」をいふのであらう。元寇の役に大敵を追ひ拂つたのも、この「まごころ」の力であらう。兄弟牆に闘いでも、いざとなれば、舉國一致、外敵にあたるといふ精神、この皇室を保護し、この皇土を維持しようとする精神は、國難のあるごとに忽ちに發現して來る。

この「まごころ」即ち皇室に對する忠の觀念が、武家時代に至つては、轉じて主従の關係の連鎖となつた。これが即ち武士道の精髓となつたのである。自分の仕へる主君には、「まごころ」をもつて盡す、即ち忠を盡して身命を惜しまず、事ある時は馬前に討死す

重源

淨土宗の僧で、東大寺を復興した。建久六年、年七十七餘。

孔孟の教

支那古代の聖人孔子と孟子の教、つまり儒教のこと。

武士といはず町人といはず

るのが家來たるものの心掛となつた。頼朝は僧重源が君といつたのを戒めたが、江戸時代になつては、諸侯は將軍に對して臣、諸侯の家來は陪臣といひ、孔孟の教は常に主従の關係に應用せられて説かれた。しかし元來、日本で君臣といふものは、皇室と國民との關係の外にはないはずである。

武士道は士の守るものであつて、町人以下には及ばぬが、この精神はいつしか武士といはず、町人といはず、男といはず、女といはず、一般國民の間に擴つてしまつた。奉公といふことは、元來朝廷だけに對する語であつたが、通常の雇人にも奉公人といふ語を用ひるやうになつた。町人、百姓の間にも義理の重んぜられた話は、小説、淨瑠璃をはじめとして、講談、落語等の末にもあらはれてゐる。侠客は町人間の武士道を代表したものである。その本を正せば、君臣の關係が、主従の關係にうつされた結果である。しか



し主従といつても、その關係は根本に於て君臣の關係とは異なるのである。

戰國時代に於ても、毛利元就が即位の金を奉つたり、織田信長が勤王に盡したといふことは、兩氏が大いに興つた所以である。その結果は豊太閤の統一となり、徳川氏の幕府となつたが、徳川幕府が譜代親藩外様の區別を設け、いかにその統御策に苦心したかといふことを見ても、主従の關係が、君臣の關係のやうにかぬことがわかる。それ故、尊王倒幕論が起つたと同時に、さすがの徳川氏も忽ちばた／＼と倒れてしまつた。臣陪臣などと表向きに稱へさせたことも、實は借りものであつたからである。

一旦主従の關係にうつされた忠の解釋は、明治の維新と共に再び昔の通り皇室に對するものと限られてしまつた。否、明治の維新そのものは、その解釋を皇室に限るものとして、徳川幕府を

本來の姿に還つた

身命を抛つ機會を見出す

士氣を鼓舞してゐる

うち倒したのであつた。維新後は士農工商は皆平等になつて、ここに一般國民が兵役に就くことになつた。陪臣陪々臣の制度は廢せられて、いづれも皇室對臣民の本來の姿に還つた。久しい間武家で養成した武士道的精神は、今や皇室に向つてのみ捧げられることになつた。武士町人にも行きわたつて、小説淨瑠璃の平民的文學にも映じてゐる國民の思想は、その犠牲的精神をもつて國家のために身命を抛つ機會を見出したのである。日露戰爭の當初には、何故に日本兵が強いかといふことは、西洋人間の疑問であつた。「米を食ふから強い」ともいひ、「水を飲むから強い」ともいひ、中には「日本兵は米の握飯の中に梅干を入れて國旗の形にして食ふ。毎日國旗を食つて士氣を鼓舞してゐるのだ」といふ人もあつた。このやうな物質的原因をもつて強兵の出来るはずがない。太古以來の皇室に對する「まごころ」のあらはれに外ならぬ

のである。たゞこの「まごころ」の精神が、萬世一系の國體を成した原因で、世界有數の大強國となつた所以である。 (國民性十論)

## 國民精神篇

### 日本語の特質 その二

一

我が國語には、頗る長々しい語彙をなしてゐるものが少くない。これは、國語の音韻が、母音で終つてゐるために發音し易く、隨つて合成語をつくることが甚だ容易であるところから來てゐるものと思はれる。

例へば、八や尺さか瓊にの五い百ほ箇つの御み統すまの玉たま  
「小櫻緘せきの大おほ鎧よろいといふやうな類である。またかうして合成語をつくる際には、「じろく」「うつらく」「がらんく」などのやうに、同音を重ねることも多いが、これは大抵、擬聲や擬態をあ

らはすのである。しかし中には「ながくし」は「ななくし」「まめくし」「おどろくし」などのやうに、意味を強める場合もある。

また我が國語の最も著しい特色の一つとして、聯想を利用し、美妙な表現をすることが擧げられる。聯想作用が起るには、何か近似した手がかりが必要であるが、我が國語には、同音にして異義の語や、意味の類似した語が少くないので、それ等を利用して極めて容易に聯想作用を働かすことが出来る。かうして生み出されたものが、枕詞序詞掛詞縁語重音重語等である。

枕詞は、或語に冠せしめて、これを修飾し、または句調を整へ、優美な趣を生ぜしめるものである。この枕詞には、「高光る一日の御子」「まこもかる淀」などのやうに、顯著な點を擧げるもの、「ぬばたまの一夜」「犬じもの道に臥し」などのやうに、類似の點を擧げるもの、「沖つ鳥」「鴨」「百足らず」「八十」などのやうに、相關聯した點を

淀  
今の京都府淀町。

擧げるもの、「鳴く鶴」の「尋ね」「しら菊」の「知らず」などのやうに、同音を重ねるものなど、いろいろ種類がある。

序詞は、枕詞と同じやうな性質のもので、二句以上から成るものをいふのである。また枕詞が多く既成のものを用ひるのに反し、序詞はその場合々に應じて作者が創作する。足引の山鳥の尾のしだり尾の「長々し」といふのは意味の上から、東路の小夜の中山「なか／＼に」といふのは音の上から來たものである。

掛詞は、同音異義の語を利用して、一語に兩様の意味を含ませるもので、呼べど答もなく（無く泣く）ばかり「いさしら（知ら白雲）のはる／＼と」といふやうに用ひられる。

縁語は、意味の上で縁のある語を用ひて修飾するもので、また立ち（截ち）歸る（返る）旅衣、浦裏、山過ぎて美（身濃幅）の國、今こそ晴るれ、恨が晴れる、意望月よなどのやうに使用されてゐる。

小夜の中山  
静岡縣金谷町の西北にある峠で、東海道の難所であつた。

重音は同じ音の語を重ねて聲調を整へるものであつて、あかつきごとの「閼伽の水」かみはかも川しもはしら川などの如きものである。

重語は、數詞などを並べて、語句の調子を整へるもので、月は一つ、影は二つ、満(三)つ、汐の夜(四)の車に月を載せて「天下第一の二つの銘の御(三)劍にて、四海を治め給へば、五穀成就もこの時なれや」などは、その好例である。

かういふやうな表現の様式も、すべて我が國民の統一を重んじ、調和を喜び、輕快を好む性情と、國語の性質の微妙さとが結びあつて生み出されたものと見るべきであらう。

## 二

また我が國民は、外國と交際するやうになつてから、盛んに外國語をとり入れて、國語の語彙を豊かにした。古くは、漢語や佛教

語を、近くは、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランス、ドイツ等の西洋諸國の語を、次第に多く輸入して、今やその數は驚くばかりに殖えて來てゐる。しかも、かうして輸入した外國語は、すべて噛みこなし、整へ直して、日本語の中へ完全に同化させてしまふのが常であつて、ここにも、包容同化といふ我が國民性の特質の働いてゐることが認められる。

即ち漢語にしても、咲の本義は「わらふ意であるのを、さく」と訓じ、詫の本義は「あざむく、または、ほこる意であるのを、わぶ」と訓じ、それ／＼その訓通りの意味を與へてゐる如き、漢語の日本化といふことが出来る。また、歌留多、襦袢、金巾、合羽、金米糖等の語に至つては、すべて近世初期に入つたポルトガル語を原語としてゐるのであるが、今日では、これ等を外來語と思ふ者もないまでに、巧に日本化されてゐるのである。明治以後にとり入れられたイ

ギリス語・フランス語・ドイツ語等になると、まさに枚舉に違がな  
く、それ等の外來語と、固有の日本語とが合して、インク壺・テ  
ブル掛などの語まで出來てゐる。更に、興味あるのは、日本語に當て  
はめるべき適當な漢字がないために、こがらし 凧・おちかげ 俵・さかき 榊・たうげ 峠・かみし 袴といふや  
うな字を新しくつくつてゐること、工夫に富んだ日本人の特  
性が、よくあらはれてゐるではないか。

最後に、敬語に就いて述べておきたい。我が國は、綜合的家族制  
度をもととして組織されてゐるために、國民は敬神尊皇崇祖の  
念が厚く、敬虔にして禮儀を重んずる性情に富んでゐることは、  
世界にも比類を見出し得ない。かゝる性情が國語の上にも反映  
して、著しい敬語の發達となり、我が國語の上に、一大特色を與へ  
てゐるのである。支那や西洋諸國にも、敬語は全然ないわけでは  
ないが、我が國のそれとは比較すべくもない。論語に「子曰」とある

「曰も、單に物言ふ意味に過ぎないのであるが、我が國では、のたま  
はく」と訓じて禮儀を盡してゐる。西洋諸國にあつても、よほど特  
殊の場合でない限り、皇帝に對しても敬語を用ひず、友人のこと  
を語るのと、言葉の上には何等の區別も設けられないのである。  
この敬語には、自分の方を謙遜して敬意をあらはす場合と、相  
手の方を尊敬して敬意をあらはす場合と、單に物事を丁寧にい  
ひあらはす場合との別がある。私から手紙を差上げませう。の如  
きは第一の例、あなたは何か御運動をなさいますか。の如きは第  
二の例、これは昔から珍重せられたものと申します。の如きは第  
三の例である。そしてこれ等の敬語は、身分の上下や、親疎の別な  
どによつて、それ／＼ふさはしいものが選ばれ、非常に行届いた  
使ひ方が行はれてゐるのである。

殊に、皇室に關する敬語が、例へば「大御心」「御政みそなはず」「供御

きこしめすといふやうな風に特別な發達を遂げてゐるのは我が國民の、皇室尊崇の念の熾烈なことを如實に示してゐるものであつて、特に注目すべきものである。

我々の祖先は、國語には靈魂が宿り、めでたい言葉を唱へれば、吉事を呼び、不吉な言葉を口にすれば、凶事を招くと信じてゐた。そして我が國は、よい言葉の靈が、特に著しく作用する國であると信じて、言靈ことだまの幸さいはふ國と稱したが、これは、祖先がいかに國語を尊重し、愛護したかを物語るものである。かういふ祖先に育かれ、傳承されて來た國語を、より以上に尊び、愛して、一層生き生きと、豊かに成長させてゆくことは、我々の上に課せられた、何よりも美しく、名譽ある義務ではあるまいか。

### 日本女子讀本

改制 第一版 卷六 終

野本製

昭和十二年六月二十五日 印刷  
昭和十二年六月二十八日 發行  
昭和十二年十二月五日 訂正再版印刷  
昭和十二年十二月八日 訂正再版發行

日本女子讀本 改制 第一版  
各卷 定價金 六拾錢

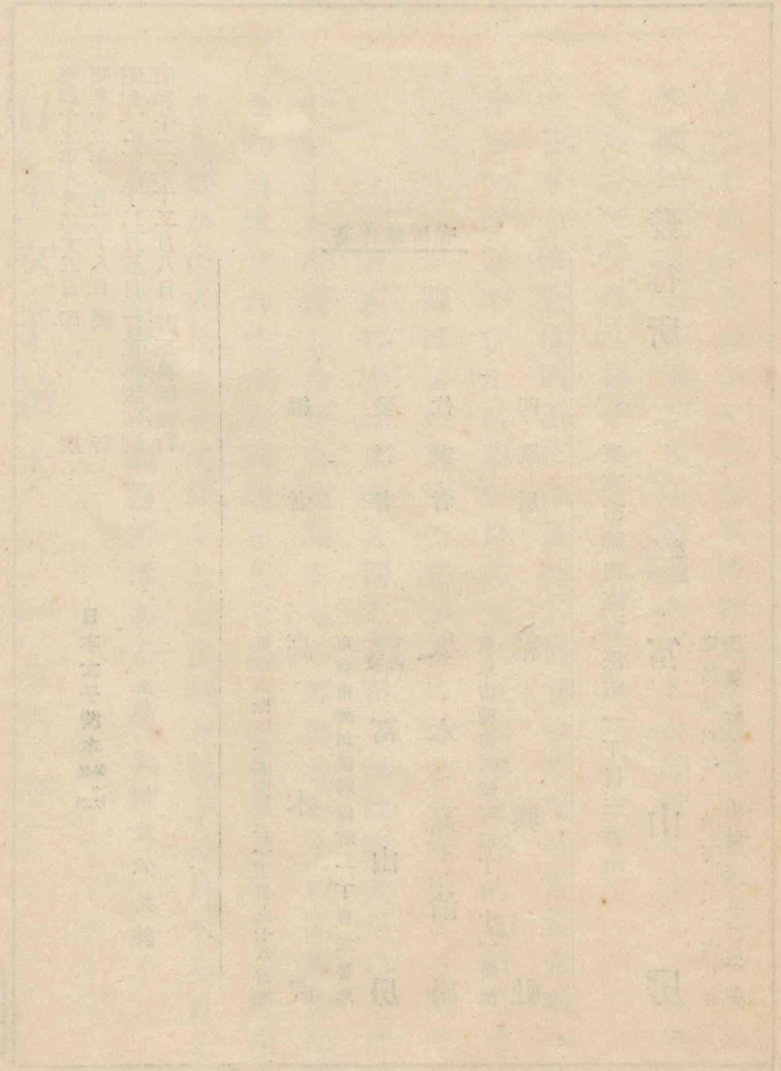


著者權所有

編者	高木武	東京市世田谷區世田谷一丁目九七八番地
發行者	富山房	東京市神田區神保町一丁目三番地
代表者	坂本嘉治	東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷所	精興社	東京市神田區錦町三丁目十一番地

### 發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地  
富山房  
電話 神田二、一七一―二、一七八番  
振替貯金口座東京五〇一八番



日本書紀卷之八

八

